

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 1

板屋 II 遺跡

平成 5 年 3 月

教育委員会



1. 板屋II遺跡全景 (1)



2. 板屋II遺跡全景 (2)



3. 板屋II遺跡出土遺物 (1) 17



4. 板屋II遺跡出土遺物 (2) 左上より 22・11・12・13・32・30

は じ め に

島根県教育委員会は建設省中国地方建設局の委託を受け、飯石郡頓原町に計画された志津見ダム建設予定地内の発掘調査を実施しております。

この報告書は、平成元年におこなった民俗調査に続いて、平成4年度に実施した板尾II遺跡の調査結果を取りまとめたものです。遺跡は江戸時代の墓地であったところであり、この地方の墓制や習俗を考える上に興味深い成果がありました。

本書が、学術資料としてばかりでなく、広く一般の埋蔵文化財に対するご理解に多少とも役に立てば幸いです。

平成5年3月

島根県教育委員会
教育長 坂本和男

例　　言

1. 本書は平成4年度、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局の委託を受けて実施した志津見ダム建設予定地内にある板壁II遺跡の発掘調査報告書である。
2. 事務局は、島根県教育委員会におき、発掘調査は島根県埋蔵文化財調査センターがおこなった。
3. 調査指導
大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、穴澤義功（房総風土記の丘研究員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）
4. 発掘調査には次の方々の参加があった。（順不同・敬称略）
安部政清、石田高吉、石森 勉、板垣守正、漆谷 篤、北尾高好、木村弘美、桐原定信、後藤清一、鹿田富祐、清水唯義、高田達夫、田島満信、那須春雄、鍛冶守蔵、深石好国、藤谷義行、藤原勝義、丸山兼一、三島淳二、毛利 充、安部やよひ、小畠明子、片山ハルミ、金築千鶴子、川上友子、北尾百合子、後長寿馬子、佐藤光子、白石サダ子、青サダメ、内藤ステヨ、長島康子、難波朝江、温湯セチコ、花田みよ子、原田みづ子、平田咲江、深石広子、三上光江、三原明子、田中君枝、佐藤綾子、三浦登久子、松川久恵、安食真人、景山直美、原田明紀、川上房夫、中岡勲、三浦鉄郎、安食キノエ、伊藤力也、那須芳子、三浦サツエ、荒川あかね、佐藤綾子、佐藤 浩
5. 調査協力
関口広次、五明田福一、頬塚町教育委員会
6. 発掘調査の調査員として、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター調査第四係長）、木村直人（同主事）、大野俊治（同主事）、田中亮亮、山崎順子があたった。
7. 執筆にあたっては、上記調査員で検討し、文末に執筆者を明記して文責を明らかにした。
8. 第3回比久尼塚古墳の略測図のうち、墳丘は、渡辺貞幸氏と三宅博士氏、石室は五明田福一氏と三宅博士氏の協力をいただいた。
9. 本報告書の編集は内田律雄がおこなった。

目 次

I. 調査にいたる経緯.....	1
II. 周辺の遺跡について.....	3
III. 板屋II遺跡.....	8
1. 遺跡の概要	
2. 検出した遺構	
3. 出土した遺物	
4. 遺構と火山灰層	
IV. 板屋III遺跡	24
V. 小丸遺跡	27
VI. まとめ	30
VII. 写真図版	

I. 調査にいたる経緯

神戸川は、島根県の東部に位置し、その源を中国山地の島根県と広島県境の女亀山（標高 830 m）に発する。そして、赤来町から北へ流下し、途中で頓原町の頓原川、佐田町の伊佐川、さらに掛合町から流れる波多川等の各支流と合流して出雲市の南西部に至り、そのあたりから西に大きく流路を変えて、出雲平野を貫流し日本海に注いでいる。建設省の資料によれば、流域面積は471km²、流路延長 87 kmの一級河川である。

一方、この神戸川に並ぶように、流路延長が 152.7 km の斐伊川が流れている。斐伊川は古来幾度となく大洪水を引き起こしており、中下流域において大規模な氾濫を招いてきた。

このような灾害を防ぐため、有効的な洪水調節の手段として、斐伊川の流量の一部を分流して神門川に合流させる計画（斐伊川放水路事業）と、神門川の上流でも流量を調節する必要から飯石郡頓原町を中心とする志津見ダム建設の計画が立案された。これと同時に、島根県では出雲圏域の産業発展を期して、長浜工業団地などに工場誘致を図っており、その為に下流域での工業用水や飲料水などの急増が予想され水



第1図 頓原町位置図

源の確保も急務になった。

志津見ダムは、このように治水と利水の両面を担う目的で計画され、その建設予定地内にある埋蔵文化財の有無を、建設省から島根県教育委員会に照会された。これを受け、県教育委員会文化課は建設省と協議を重ね、遺跡の取り扱いのための資料を得るために発掘調査を実施することとなった。

本書で報告する板屋II遺跡は、平成4年度に実施した発掘調査の概要である。

(大野 傑治)

II. 周辺の遺跡について

頬原町大字志津見には、これまで古代にさかのほる遺跡はあまり知られていなかった。わずかに、天平5年に編述された「出雲國風土記」に記載される「通道」の中に「志都美剣」が見られるが、その位置については必ずしも特定されておらず、地元の言い伝えでは明劍神社付近と言われてきた（島根県遺跡地図T9）。大字八神東には石室構造を持つ比丘尼塚古墳（頬原町指定遺跡・第3団）がある。また神戸川上流部の赤米町大字来島の川尻地区に永原奥遺跡・平石遺跡などがあり、ここからは縄文・弥生時代の土器が発見されている（第4団）。

1988年に頬原町教育委員会が行った埋蔵文化財詳細分布調査によって、中原古墳・貝谷古墳が発見され、与一原・五明田・段原・森・神原・板屋・門・貝谷などが遺物散布地として知られることになり、これが発掘調査の端緒になった。

これらの遺跡は、この地域を北へ流れて日本海にそそぐ一級河川の神戸川沿いの河岸段丘上に分布している。この段丘を構成する土層は、地元で「ハイカ」と呼んでいる火山灰層で、この地域での堆積層は厚く、この下からはまだ遺跡は発見されていない。1991年に頬原町教育委員会が行った五明田遺跡の発掘調査では、縄文時代後期の磨消文土器が大量に出土したが、この遺構が埋り込まれていた地山はこの火山灰層であった。

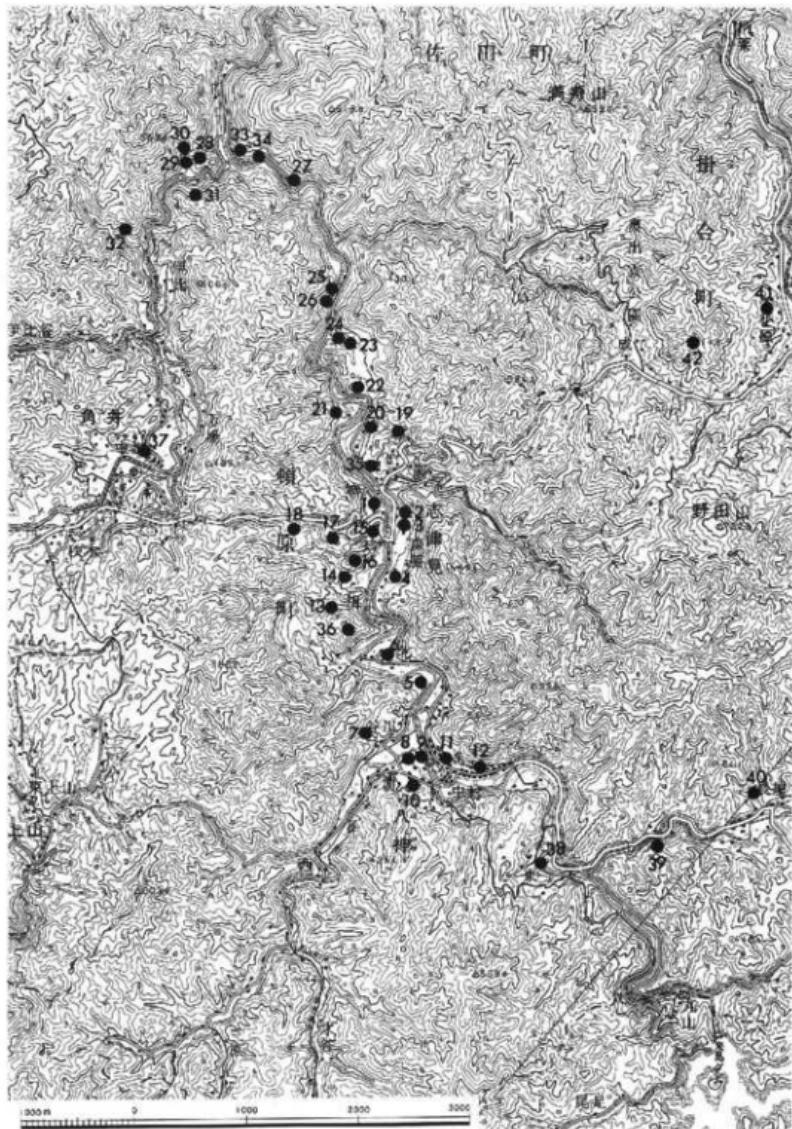
昨年度、島根県教育委員会によって発掘調査を行った森遺跡と、現在調査を進めている門遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡であるが、これらの遺構もこの「ハイカ」の上部にある。

この地域では、古代遺跡の他に多いのが鉄生産遺跡である。このことは鉄の生産がこの地方の主要産業の一つとして古くより盛行したことをうかがわせるものである。

古文書の中に見られる鉢には弓谷鉢・下山鉢・堂ノ原鉢（吉田村田部家文書）と権原鉢（田儀桜井家文書）があるが、これらの記録に現れない製鉄遺跡は10ヶ所を越える。その中には、近世以前にさかのほる規模の小さい野鉢とみられるものもある。

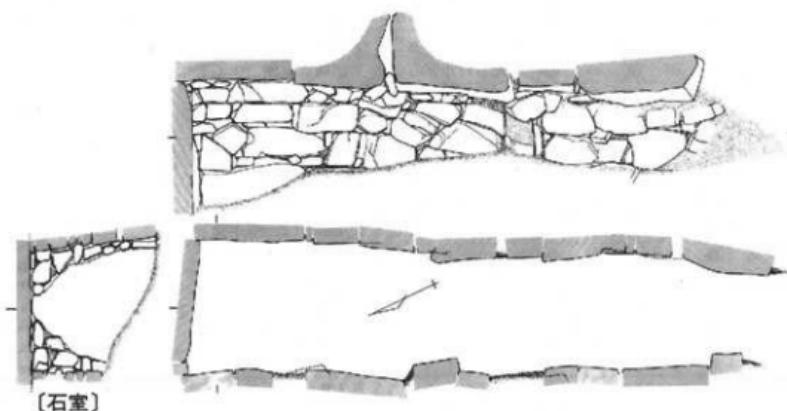
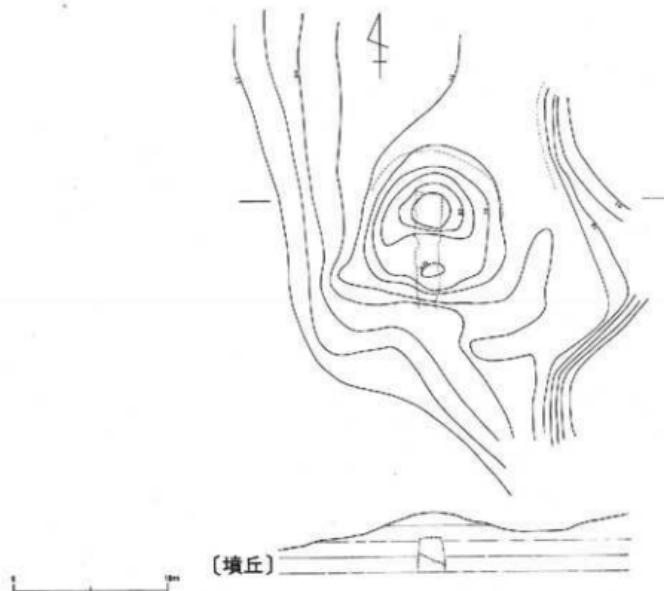
本書で報告する板屋II・IIIの各遺跡からも鉄滓が出土しているが、これも周辺に製鉄遺跡が存在することを示唆している。

この地域の中世遺跡に山城跡がある。森脇地区の「森脇山城跡」は古文書にも現れる城跡で、一部発掘調査や地形測量によても典型的な戦国時代の山城跡であることがわかっている。このあたりは出雲・石見の国境線となっており、中世にこの地方を制覇しよ

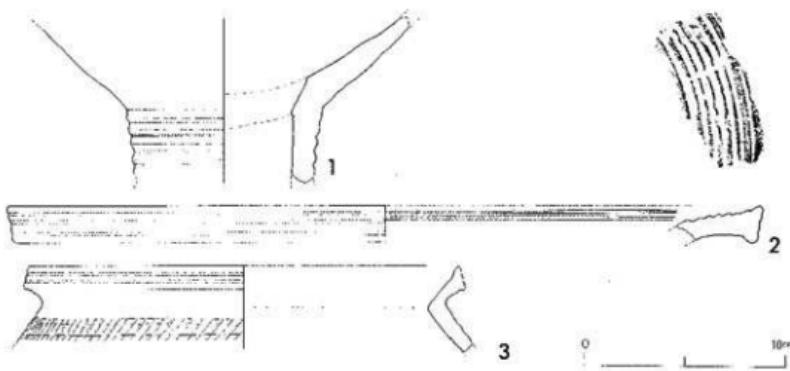


第2図 志津見ダム建設予定地内遺跡分布図

	遺跡名	所在地	種類	備考
1	門遺跡	頬原町大字志津見門	集落跡	
2	森羅金藏鉢跡	頬原町大字志津見森脇	製鉄遺跡	
3	鍛冶屋鉢跡	頬原町大字志津見森脇	製鉄遺跡	
4	神原遺跡	頬原町大字志津見神原	遺物散布地	須恵器 土師器
5	中原遺跡	頬原町大字八神中原	古墳	墳丘は消滅
6	小丸遺跡	頬原町大字八神北	城跡	
7	谷川遺跡	頬原町大字八神谷川	遺物散布地	土師器
8	森遺跡	頬原町大字八神森	集落跡	土師器 須恵器、住居跡
9	おとみーさん遺跡	頬原町大字八神森	祭祀遺跡	
10	五明田遺跡	頬原町大字八神五明田	遺物散布地	繩文土器
11	明眼寺遺跡	頬原町大字八神中村	城跡	鐵滓散布
12	中村上遺跡	頬原町大字八神中村	城跡	野耕跡
13	森脇遺跡	頬原町大字志津見森脇	城跡	
14	阿丹谷遺跡	頬原町大字志津見阿丹谷	城跡	
15	引地城跡	頬原町大字志津見引地	城跡	古墓群
16	茶山城跡	頬原町大字志津見森脇	城跡	
17	鉄井廻鉢跡	頬原町大字志津見森脇	製鉄遺跡	消滅
18	大平城跡	頬原町大字志津見大平	城跡	
19	板屋遺跡	頬原町大字志津見岡	遺物散布地	須恵器 土師器
20	徳原鉢跡	頬原町大字志津見徳原	製鉄遺跡	
21	後平城跡	頬原町大字志津見後平	城跡	宝塗印塔残欠
22	貝谷城跡	頬原町大字志津見貝谷	城跡	
23	貝谷遺跡	頬原町大字志津見貝谷	古墳	土師器 須恵器
24	貝谷鉢跡	頬原町大字志津見貝谷	製鉄遺跡	一部消失
25	丸山二号鉢跡	頬原町大字志津見丸山	製鉄遺跡	
26	丸山一号鉢跡	頬原町大字志津見丸山	鐵治跡	
27	大橋新跡	頬原町大字志津見堂原	製鉄遺跡	
28	権現山城跡	頬原町大字角井下山	城跡	
29	下山遺跡	頬原町大字角井下山	遺物散布地	石器
30	下山鉢跡	頬原町大字角井下山	製鉄遺跡	
31	権現山鉢跡	頬原町大字角井下山	製鉄遺跡	
32	獅子谷鉢跡	頬原町大字角井獅子谷	製鉄遺跡	金屋子祭祀跡
33	殿渕山毛宅前鉢跡	頬原町大字角井殿渕	製鉄遺跡	
34	殿渕金ヶ須畠跡	頬原町大字角井殿渕	製鉄遺跡	
35	志都美刻	頬原町大字志津見岡	古墳	地元伝承
36	森脇山城跡	頬原町大字志津見森脇	城跡	
37	角井遺跡	頬原町大字角井中郷	遺物散布地	石器 繩文土器
38	比久尼塚古墳	頬原町大字八神東	古墳	町指定史跡
39	獅子古鉢跡	頬原町大字獅子	製鉄遺跡	
40	竹谷鉢跡	頬原町大字獅子	製鉄遺跡	
41	波多宝塗印塔	掛合町大字波多	古墳	
42	比丘尼城跡	掛合町大字波多	城跡	



第3図 比久尼塚古墳略測図



第4図 来島ダム内出土遺物

うとした毛利・尼子氏による雲芸攻防戦の「戦記物」にも登場するところである。それだけに大小の山城跡が多く、その構造も複雑多種にわたっている。

以上のように志津見地区の神戸川流域は出雲・石見の国境、また山陰と山陽を結ぶ交通の要衝として古代から中世にかけて重視されてきた地域であり、それにともなつて各年代の様々な遺跡が存在することが考えられる。

(山崎 順子)

III. 板屋 II 遺跡

1. 遺跡の概要

調査地は標高 500 m 級の山岳地から張り出した丘陵先端部の標高 293 m 附近に位置しており、北流する神戸川を本流にして、それに東から注ぐ弓谷川との合流点に当たる。現地と川沿いの沖積面との比高差は 30 m ある。地形は斜面を階段状に削平し、居住地・農耕地が広がる。遺跡はこの加工段の最上部の地点にあり、現状は畠跡と杉林（20 年生）であった。地元の伝承によると、かつては人家があったが消滅し、その後農具小屋があったということである。現地形はわずかに南に傾斜していたが、地山はそれよりも急な地形を示していた。この上面を精査した結果、45 個の土壙と 30 個のピットを検出した。表土および搅乱土からは石器や縄文・弥生期の土器片の他に須恵器・陶磁器・鉄滓が出土している。

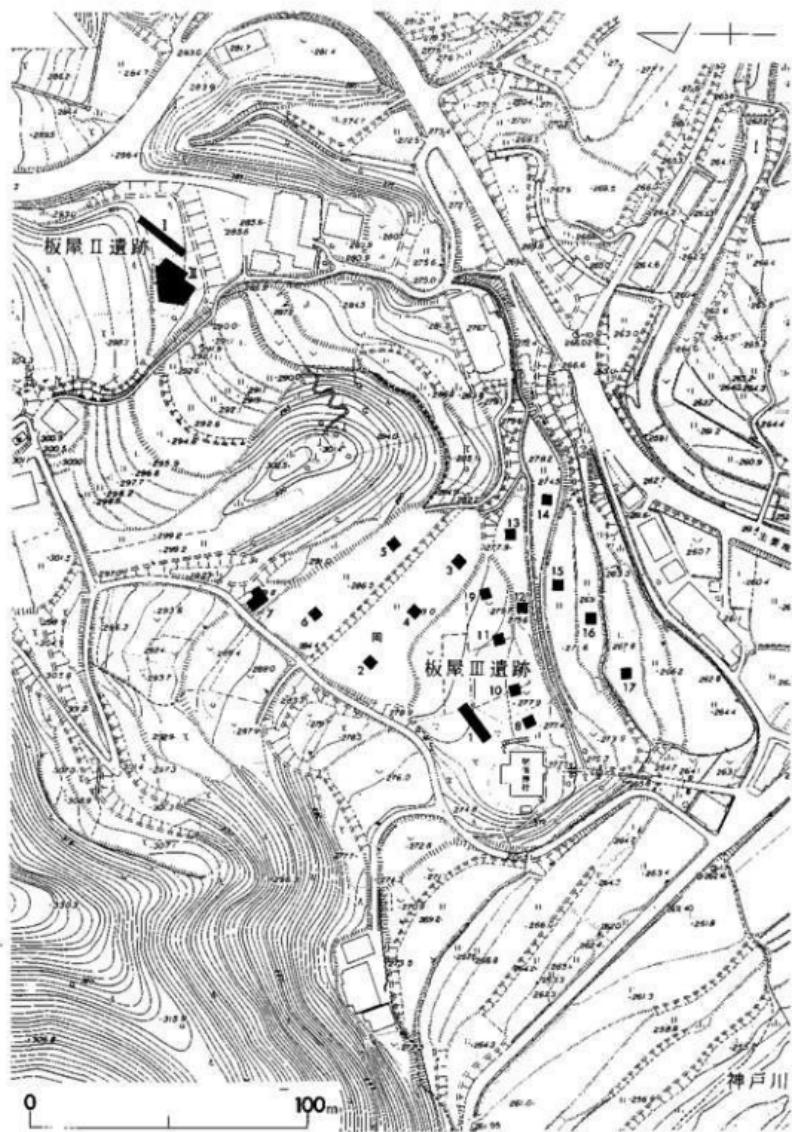
2. 検出した遺構

45 個の土壙を大別すると 4 群に分けられるが、各群とも等高線に沿って東西には一線上に並んでいる。これらの土壙は形状・規模・出土品から見て近世の墓壙と判断した。（第 7 図）

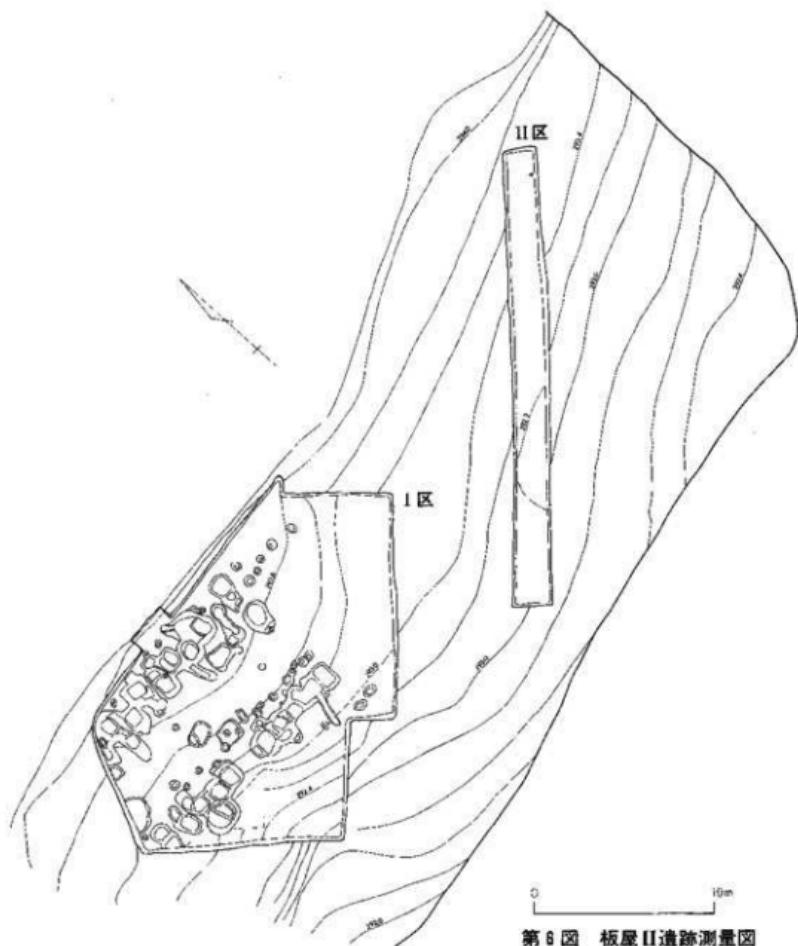
I 群は東西 7 m の間に 9 個の土壙が切り合って並列している。規模に大小の差があり、形状も円形・方形・長方形とさまざままで、深さは 1.0 m ではほぼ平均的である（第 8 図）。この土壙群の北側に並行するピット群は卒塔婆または墓標を建植したものと考えられる。SK 30.31.32 の上部には石群が見られ、SK 33 には南側の離れた位置から斜降して土壙の底部に達する溝状の落ち込みが設けられていた。この形状は特殊なものとして注目される。

II 群は I 群西側に隣接する 9 個の土壙群で、この土壙は更に西側に続いているが調査は区域内にとどめ、SK 35 を西端の土壙とした（第 9 図）。ここでは形状は方形のものが多く、深さは 1.0 m 前後で若干のばらつきがある。SK 24.28.35 は石群を持つ、この群から僅かに南にはみ出した SK 02 は真円形の大型で、最大の法量をもち、周囲の壁と床一面に黄褐色の粘土を張りつけた整った土壙で、出土品も多かった。

III 群は北側の崖の直下に並ぶもので、21 個の土壙が切り合っている。この土壙群も II 群と同様に西側に連続するものであるが、II 群と同じ取り扱いをした。形状は方形のものが多く、間に円形のものが混じる（第 10 図）。深さは SK 06 が 1.5 m と最も

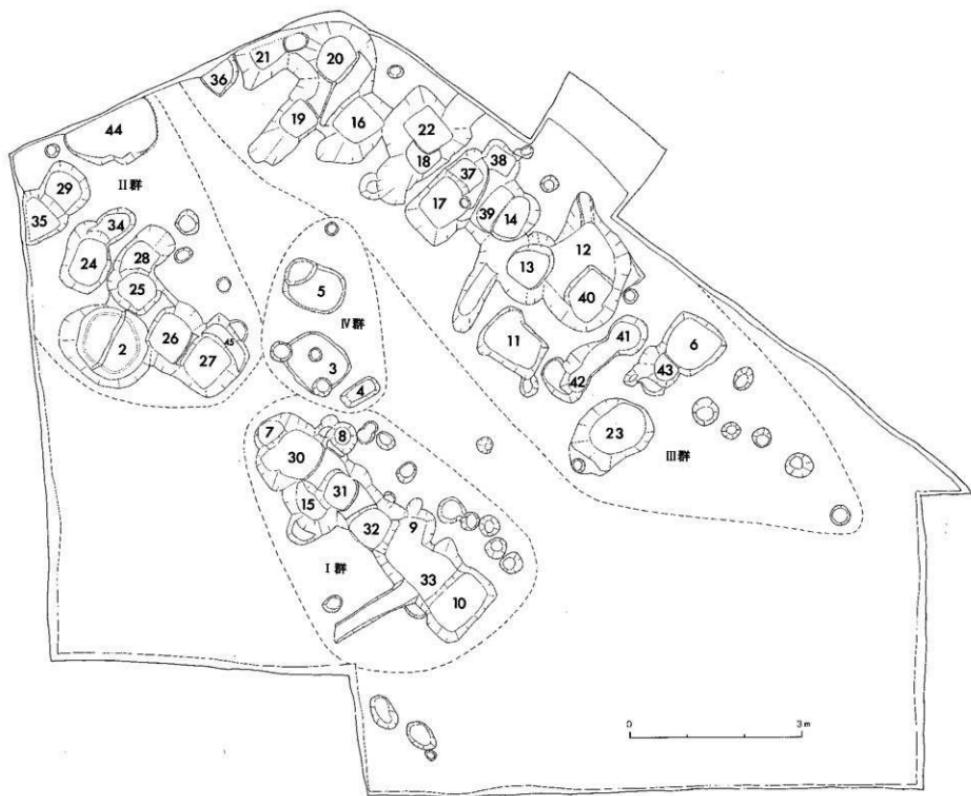


第5図 板屋遺跡調査区配置図

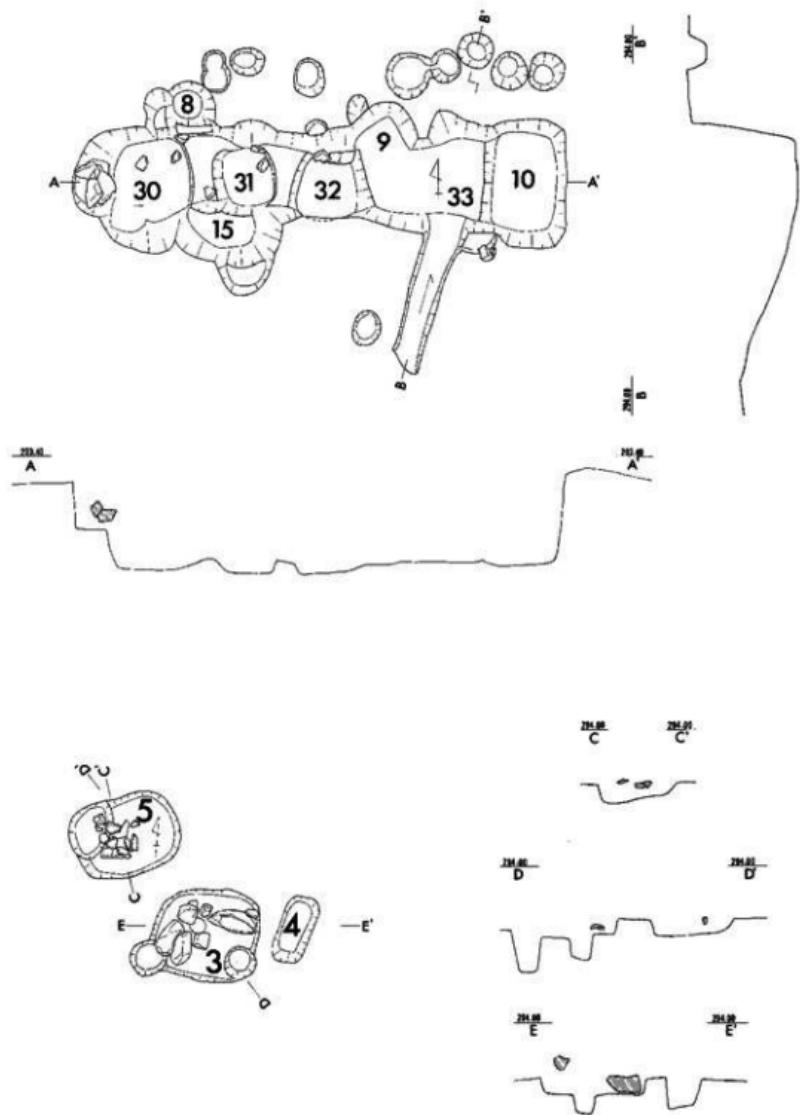


第6図 板屋II遺跡測量図

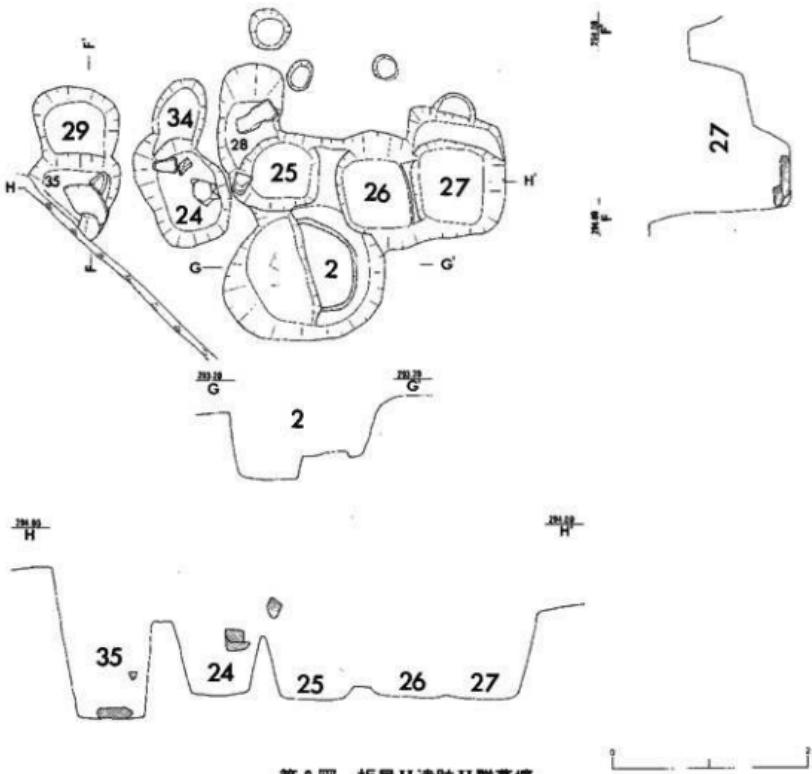
深く、他のものは1m前後でほぼ均一である。石群を持つものはSK 06.16.19.20.39で、SK 06の真上とSK 22の北側のやや大きめの川石は元あったといわれる人家の礎石とも考えられる。他の石は山石である。この土壙群の北側にも4個のビットがあるが、これも粧標類を埴植したものとみられる。SK 12.13.19にも離れた位置から斜降して土壙内に入る溝状の落ち込みが見られたが、I群のSK 33と同様の目的で掘られ



第7図 板屋II遺跡墓塚群配置図



第8図 板屋II遺跡墓塚群（上：I群、下：IV群）



第9図 板屋II遺跡II群墓壙

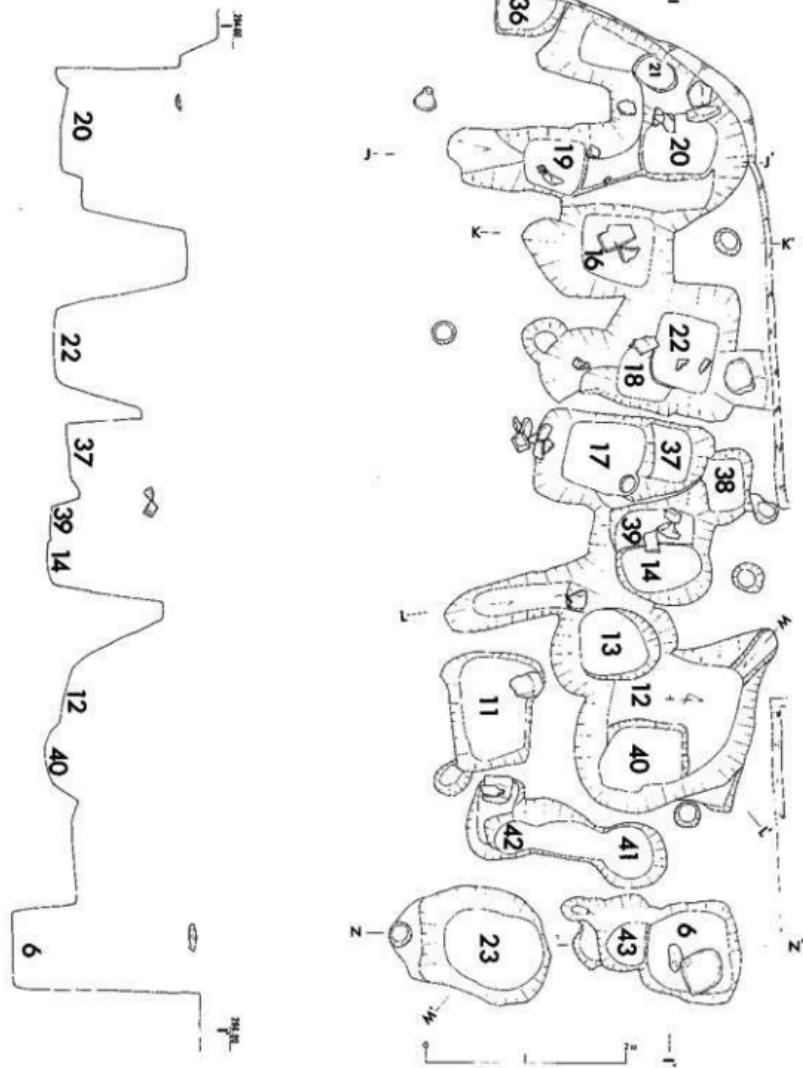
たものと判断した。

IV群は調査区中央部の3個の土壙と2個のピットである。この土壙は浅く、深いもので50cm。SK 03.05は石群を持ち、SK 03の中央の落ち込みからは他の土壙からの出土品とは異なる性格の遺物が出土している。

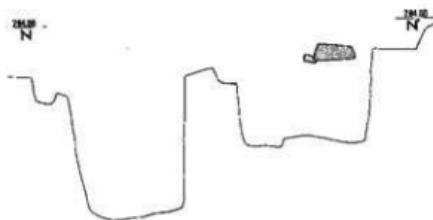
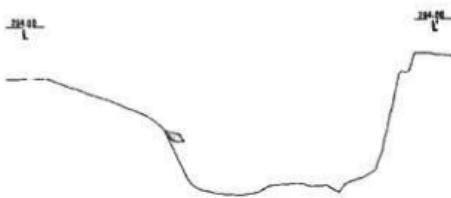
この調査区の東側約10mの位置に北東方向に向かい2m×25mのトレンチ掘りを行ったが、ここでは数個の鉄滓の他には、遺物・遺構はみとめられなかった。

3. 出土した遺物

発掘によって出土した遺物は遺構に伴出したものと、表土・遺物包含層からのもの



第10図 板屋II遺跡III群墓壙

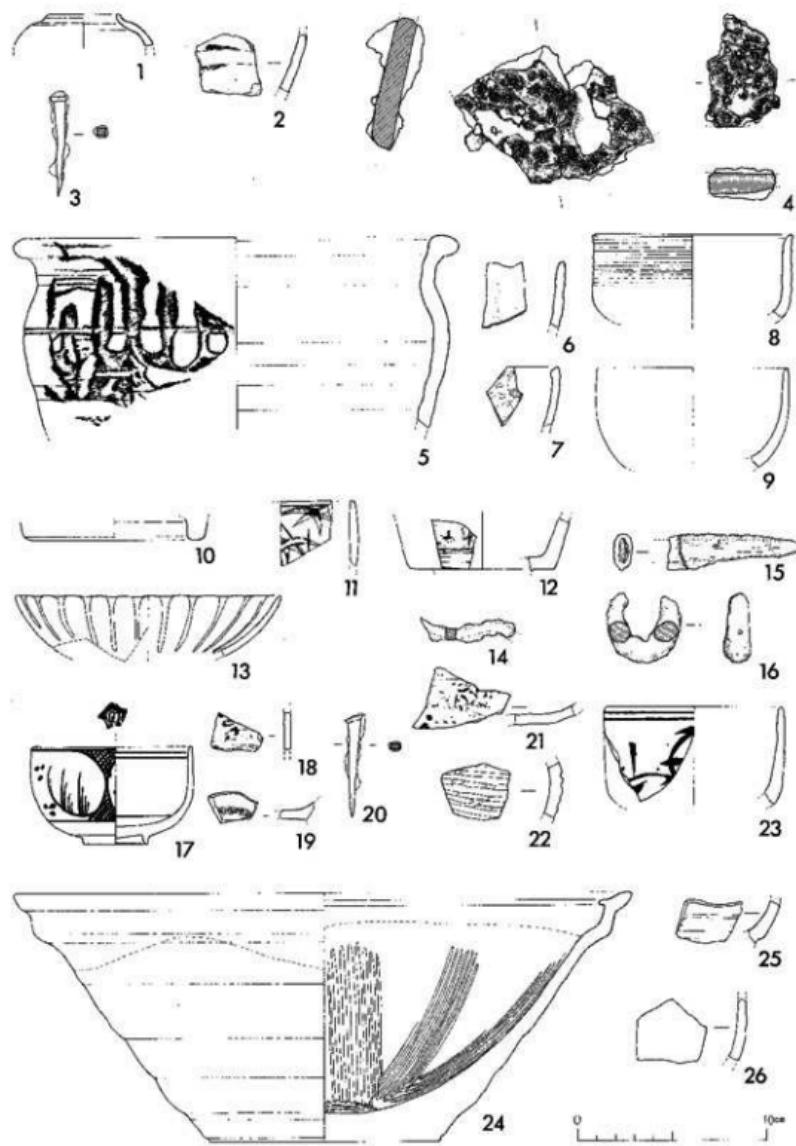


第11図 板屋II遺跡III群墓横断面図

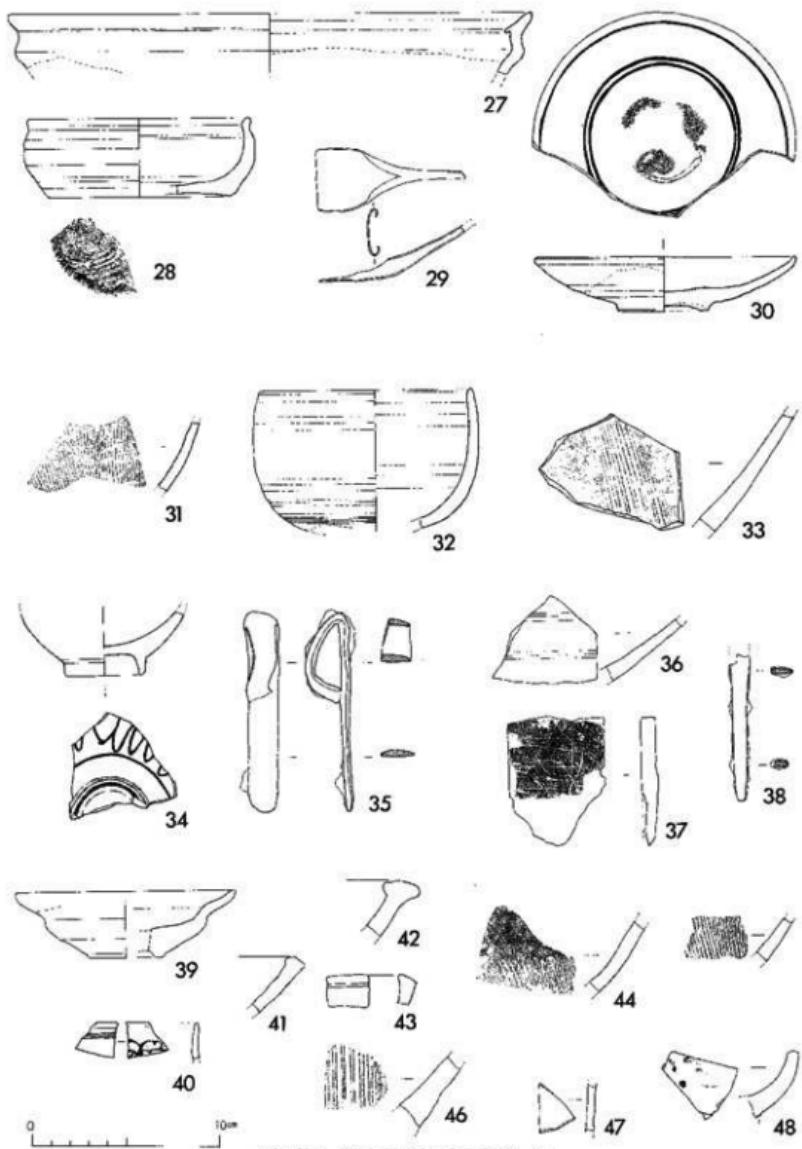
表2 板屋II遺跡 各土壤の法量・出土遺物一覧表

遺構名	法量(タテ×ヨコ深さ)	形態	遺 物	時 期	備 考
S K · 01					
02	1.60 × (1.40) × 0.74	円 形	肥前灰釉、染付碗、白磁碗、斑目文片 の鉢、鐵器、刀子、貝器	17~19世紀	
03	1.08 × 0.96 × 0.20	長方形	肥前灰釉付碗、瓶、美濃系灰釉瓶、 合掌の瓶、鉢		
04	0.70 × 0.32 × 0.30	長円形		近 世	
05	1.10 × 1.00 × 0.16	長方形			
06	1.00 × 1.02 × 0.92	方 形	肥前系染付碗	19世紀	
07	0.80 × (0.64) × 0.49	円 形			
08	(0.56) × (0.56) × 0.89	円 形	唐津灰釉皿、肥前青磁碗、瓶、石	17~19世紀	
09	(1.16) × 0.94 × 1.10	長方形			
10	1.30 × (0.90) × 1.05	長方形			
11	1.16 × 0.84 × 1.33	長方形			
12	1.78 × 1.64 × 1.40	方 形			清状の遺構
13	1.26 × (0.74) × 0.98	長方形	肥前灰釉付碗、鉄輪盤、瓶、 美濃系灰釉瓶、合掌の瓶	16~19世紀	
14	1.24 × (0.72) × 1.42	長方形	肥前灰釉盤鉢	17世紀前半	清状の遺構
15	(1.12) × (0.82) × 0.44	長方形			
16	1.16 × (0.93) × 1.35	方 形	須恵器坏、肥前灰釉皿	17世紀前半	
17	(1.16) × 0.92 × 1.30	長方形	福岡? 瓷跡	17世紀後半	
18	(0.84) × (0.76) × 0.32	方 形			
19	(0.80) × 0.64 × 1.19	方 形			清状の遺構
20	(1.04) × (0.84) × 1.25	方 形	占鏡		
21	(1.10) × (0.80) × 1.16	長方形			
22	1.32 × (0.96) × 1.28	長方形			清状の遺構
23	1.36 × 1.12 × 1.53	長方形	肥前灰釉碗、鉄輪盤鉢	17世紀前半	
24	(1.10) × 0.82 × 0.64	長方形	肥前染付碗、鉄器	17世紀後半	
25	(0.92) × (0.80) × 1.04	方 形	唐津灰釉皿、碗、刀子	17世紀初頭	
26	1.20 × (0.90) × 0.99	長方形			
27	(1.04) × (1.00) × 0.90	方 形			
28	(1.16) × 0.64 × 0.91	長方形			
29	0.90 × (0.84) × 0.60	方 形			
30	1.20 × (0.95) × 0.98	長方形	肥前系染付碗	16~17世紀	
31	(0.80) × (0.66) × 1.11	方 形			
32	0.92 × (0.94) × 1.19	方 形			
33	(1.28) × (0.84) × 1.02	長方形			清状の遺構
34	(0.84) × 0.54 × 0.48	長方形			
35	0.90 × (0.90) × 1.06	方 形			
36	0.68 × (0.62) × 0.20				
37	(1.14) × (0.94) × 1.16	長方形			
38	0.74 × (0.58) × 0.56	長方形			
39	1.18 × (0.64) × 1.39	長方形			
40	(0.90) × (0.74) × 1.31	長方形			
41	(0.74) × 0.62 × 0.70	円 形			
42	(0.60) × 0.56 × 1.04	円 形			
43	0.80 × (0.64) × 0.90	方 形			
44	(1.20) × (1.08) × 0.40	長方形			
45	(1.20) × (1.10) × 0.82	方 形			

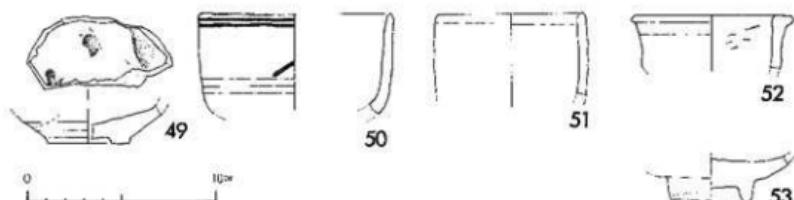
() は切り合う土壤



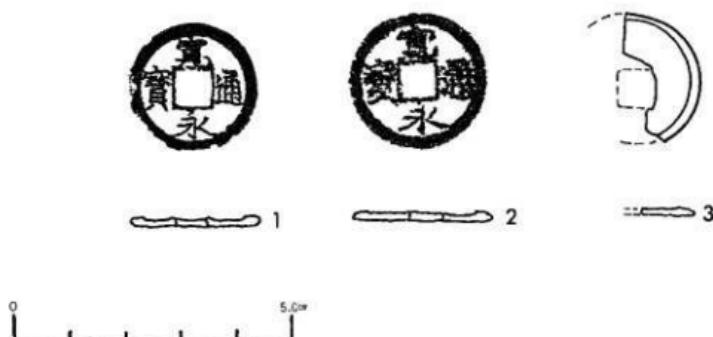
第12図 板屋II遺跡出土遺物(1)



第13図 板屋II遺跡出土遺物(2)



第14図 板屋II遺跡出土遺物(3)



第15図 板屋II遺跡出土遺物(4)

に分ける。遺構で出土したものは陶磁器が殆どで、わずかに鉄器・古銭が含まれる。これらはほとんどが近世のものである。以下その概要は別表1に示す。

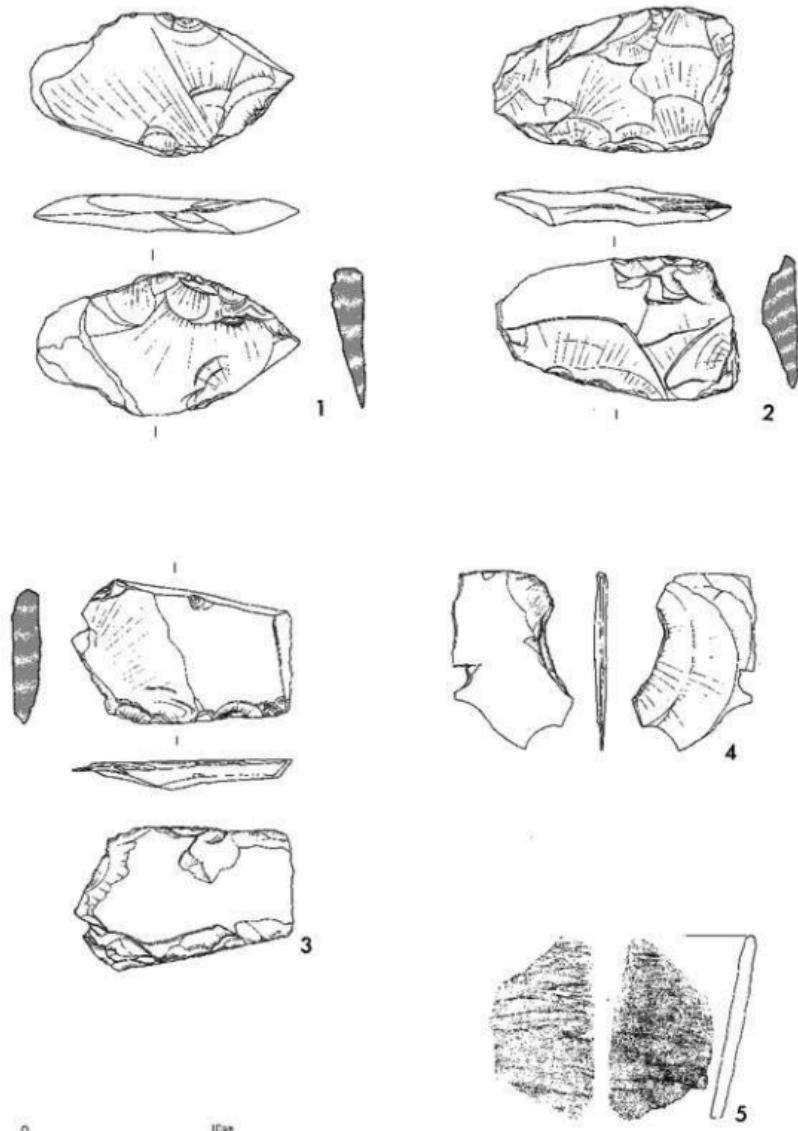
陶磁器については肥前系のものが多く、他に瀬戸、美濃系のものが4点、在地系と見られるものが3点ある。包含層からは中国産の青磁碗が2点出土している(第14図51・53)、完形で出土したものに染付け碗が1点あるが、漆で接合してあった(第12図17)。遺構に伴出する陶磁器で古いものはI群SK 30の肥前系灰釉の皿(第13図39)で、次いでII群のSK 02の染付け碗(第12図12)とIII群のSK 16の鉄絵の皿(第13図30)である。以上のものは16世紀末から17世紀初頭にかけてのものであるが、出土品を総合的に見ると18世紀から19世紀のものが多い。器種は碗が多く、皿・擂鉢・小壺・甕などがある。

その他の遺物に3個の古銭がある(第15図)。寛永通宝が2個と、他は損傷がひどく不明である。寛永通宝は銅錢で同じ書体だが鋳型は異なる。他に銅製の小型の灰搔

表3 出土遺物一覧表

(番号は分布図に対応)

種類	産地等	時期	造構群	実測番号
1 唐津 蓋付小鉢	瀬戸・美濃系?	近世前半?	I群 I	板II No.40
2 灰釉碗?	瀬戸・美濃		I群 I	板II No.41
3 鉄 鈎			I群 I	板II No.56
4 鉄鉢片(原形不明)			I群 I	板II No.59
5 磁			SK 02 II	板II No.26
6 碗	在地の可能性・白化粧	18~19世紀	SK 03 IV	板II No.45
7 青 磁	肥前・掛分け	1630~1640年代	SK 02 II	板II No.34
8 灰釉碗	在地の可能性	18~19世紀	SK 02 II	板II No.42
9 青 磁 染付	肥前	18世紀後半	SK 02 II	板II No.7
10 青又は描鉢	九州~在地	18~19世紀	SK 02 II	板II No.39
11 染付碗	肥前系・湯呑(竹文)	1780~1810年代	SK 02 II	板II No.32
12 染付碗	肥前	1610~1630年代	SK 02 II	板II No.36
13 白 磁	肥前・口紅	18末~19世紀前半	SK 02 II	板II No.35
14 鉄 鈎			SK 02 II	板II No.53
15 刀 子	柄部分		SK 02 II	板II No.51
16 鉄 器			SK 02 II	板II No.52
17 丸付碗	肥前系・湯呑	1780~1810年代	SK 03 IV	板II No.1
18 染付碗	肥前系(邊反形)No.40と同一個体	1820~1860年代	SK 03 IV	板II No.44
19 灰釉皿	瀬戸・美濃系?	近世	SK 03 IV	板II No.58
20 鉄 鈎			SK 03 IV	板II No.54
21 灰釉皿	唐津	17世紀初頭?	SK 08 I	板II No.47
22 青 磁 碗?	肥前	1830~1840年代	SK 08 I	板II No.46
23 陶胎染付碗	肥前系No.50と同一個体	18世紀	SK 13 III	板II No.24
24 鉄 描鉢	肥前 No.33~46と同一個体	17世紀前半	SK 13 III	板II No.4
25 鉄 描鉢	瀬戸・美濃系	近世前半	SK 13 III	板II No.43
26 磁	在地の可能性・白化粧	18~19世紀	SK 13 III	板II No.25
27 鉄 描鉢	肥前	17世紀前半	SK 14 III	板II No.30
28 壺	須志郡		SK 16 III	板II No.23
29 銅製灰焼き	柄の一部欠失		SK 16 III	板II No.50
30 鉄 線	肥前 砂目目	1610~1630年代	SK 16 III	板II No.5
31 描鉢	福岡? 鉄泥塗り	17世紀後半?	SK 17 III	板II No.31
32 灰釉碗	肥前	17世紀前半	SK 23 III	板II No.20
33 鉄 描鉢	肥前 No.24~46と同一個体	17世紀前半	SK 23 III	板II No.21
34 染付碗	肥前 紗目文	1650~1670年代	SK 24 II	板II No.13
35 鉄 線			SK 24 II	板II No.57
36 灰釉皿	唐津	17世紀初頭?	SK 25 II	板II No.48
37 碗 片			SK 25 II	板II No.37
38 月子?			SK 25 II	板II No.55
39 灰釉皿	肥前	1580~1610年代	SK 30 I	板II No.22
40 染付碗	肥前系(邊反形)No.18と同一個体	1820~1860年代	SK 06 III	板II No.38
41 描鉢?		中世		板II No.9
42 描鉢				板II No.14
43 弥生土器				板II No.27
44 描鉢	九州又は在地產	18~19世紀		板II No.17
45 描鉢	関西系 鉄泥塗り	18~19世紀		板II No.10
46 描鉢	肥前 No.24~33と同一個体	17世紀前半		板II No.16
47 灰釉碗または鉢	在地	18~19世紀		板II No.19
48 陶胎染付碗	肥前	18世紀前半		板II No.33
49 灰 皿	肥前 砂目目	1600~1630年代		板II No.15
50 陶胎染付碗	肥前系 No.23と同一個体	18世紀		板II No.12
51 青 磁 碗	中国 龍泉窯系	14末~15世紀中葉		板II No.18
52 弥生土器				板II No.29
53 青 磁 碗	中国 福建・廣東系	15~16世紀		板II No.11



第16図 板層II遺跡出土遺物(5)

き（第13図29）、刀子（第12図15、第13図38）、鉄釘（第12図3・20）、原形不明の鉄塊（第12図4）、硯（第13図37）がある。伴出した遺物が多かったのはSK 02とSK 03で、SK 02では陶磁器11点と古錢がある。SK 03では陶磁器の他に刀子・銅器・鉄器がある。陶磁器の中に接合可能なものが4組あったが、隣接する土壌から出土したものや、中には7m離れた別群の土壌から出土したものもあった。

包含層から出土した遺物は陶磁器の他に少量の鉄滓、粗製の縄文土器（第16図5、弥生土器（第13図42・43、第14図52）と、石器（第16図1・2・3・4）がある。石器は完形で、硬質頁岩を原材にした扁平なもので4点とも形状が似ている。収穫用具として使用されたものと考えられる。

鉄滓が包含層や遺跡周辺から出土していることについて、直近には製鉄遺跡はなく、やや離れた位置に4ヶ所の鉄跡がある。その中の徳原鉄跡・弓谷鉄跡・弓谷尻鉄跡は現地よりも標高の低い位置にあることからここからの流入は考え難い。板屋奥鉄跡は、現地の北1km奥の谷沿いにあり、山裾を削った小規模の区画であることから、野鉄跡と見られている遺跡で、上の加工段から下の谷川まで、狭い範囲に鉄滓の堆積が見られる。この谷川は途中に溜池が設けられ、板屋地区の灌漑用水、飲食用水として水路で導かれ、現地の上部に至っている。このことから鉄滓はこの鉄跡から谷川によって移動したものと考えられる。

しかし、出土した鉄滓の中にはI群中央部からの出上例であるが、遺構の埋立土中で検出されたものもあり、これは流入したものではなく、意図的に埋納された形跡がある。

墓に鉄滓を副葬する習俗は古墳時代中期から確認されており、中世・近世と連なっていることが明らかにされている。

4. 遺構と火山灰層

III群の地山を構成する上下2層の火山灰のうち、上層は地元でハイカと呼ぶが、これは「三瓶大平山降下火山灰」で三瓶火山最終期の活動による降下堆積物で、年代測定値によると（BP 3,600年±75）となっている。下層の粘土質火山灰は「三瓶橙色軽石層（浮布降下火山灰）」で、略してチョコロームと呼ばれている。その層の上下に「始良Tn火山灰」と「アカホヤ火山灰」が介在することから三瓶山周辺の発掘調査にあたっては注意される層位である。（註）

（註）『三瓶山のテフラの層序とその分布』（1987.3）林 正久・三浦 清

（田中 迪亮）

IV. 板屋 III 遺跡

試掘調査地は板屋II遺跡から200m南西側に位置する明剣神社の北東に展開する丘陵で棚田状に水田・畑・採草地などがある（第5図）。

調査地の標高は最上部で289m、最下部は268mである。

この周辺は先に実施した分布調査で、土師器・陶磁器・鉄滓などを採取したことから周知の遺跡とされたところである。試掘にあたっては17地点にグリッド（総面積204m²）を設定した。

G1は明剣神社裏の竹藪の中に3m×14mのトレンチを入れた。ここでは比較的浅い位置で土師質土器、石錘・石鐵・鉄滓が出土し、土壙1と住居跡とみられる規格性のある落ちこみの一部が認められた。

G2～7は水田跡で、G2からは土師質土器・須恵器・陶磁器・鉄滓が多く出土した。そのほかのグリッドでも数量の差はあるが、いずれからも同質のものが出土している。

G6ではピット・土壙のプランが認められた。この上層からは土師質土器（粗製を含む）石斧・鉄滓が出土している。

G7は検出した遺構の形状からL形のグリッド（27m²）を試掘し、土壙2、ピット4を認めた（第17図）。この土壙から完形に近い繩文の浅鉢と土壙の外側で弥生土器片が出土している。西側の円形の土壙は近世墓と推定された。

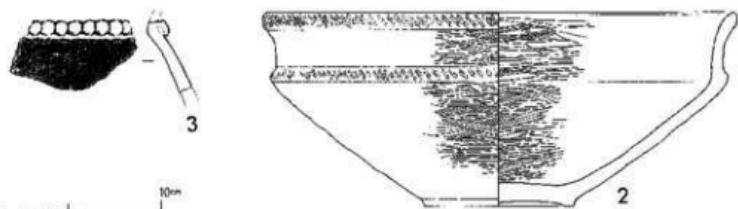
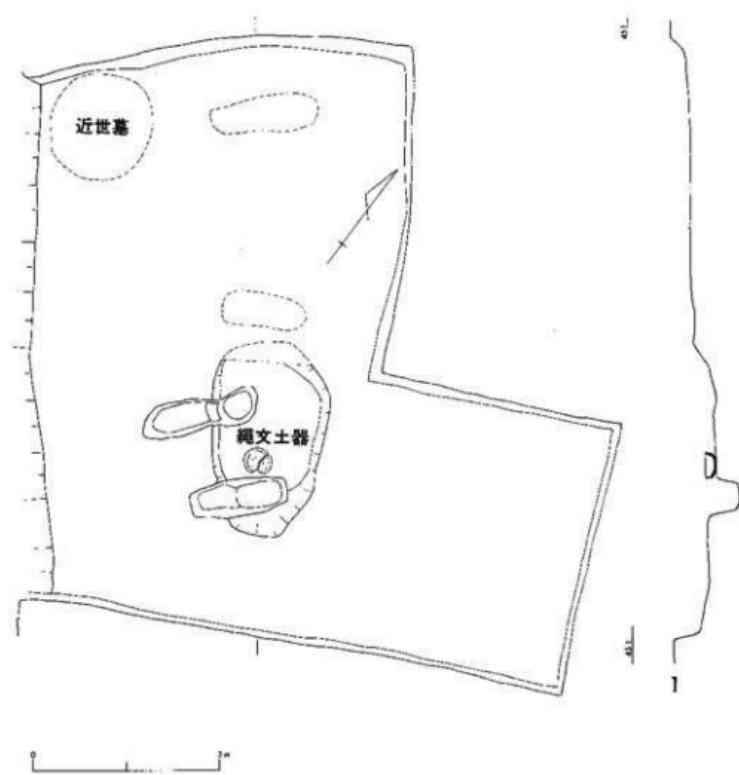
G8～13は畠跡である。G8の地表下1.4m下層には平坦面があり、その上部で集中的に弥生土器片と木炭の集積が認められ、住居跡と推定した（第18図）。更にその下層でも平坦面があり、ここでは繩文土器（磨消文）が出土している。

G11では2個のピットを検出、G12では切り合う4個の土壙が認められた。出土品は鉄滓以外は認められなかつたが近世墓と推定した。

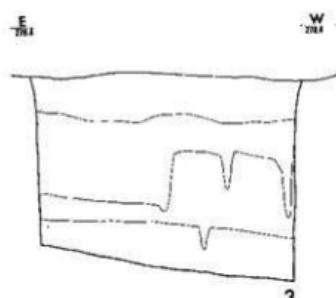
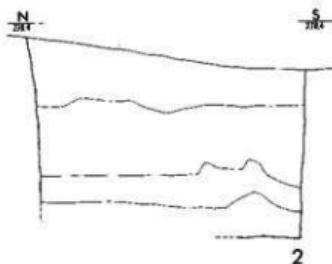
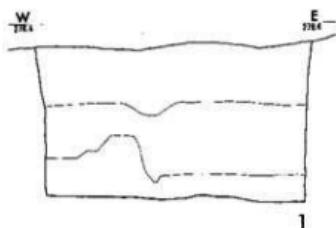
分布調査では広範囲に鉄滓が採取されたが、今回の調査でも各グリッドで出土した。G13では鉄滓と鍛冶炉の底部とみられる厚手の円形の炉材が出土している。G14～17は標高の低い位置にある水田跡である。G16・17での出土品は土師質土器と須恵器が多く、G17には石器がふくまれている。

以上、板屋III遺跡の試掘の結果、繩文文化から近世にかけて人びとの暮らしの跡が存在することが明らかになった。また試掘区域のはほとんどから鉄滓が出土していることから、鉄生産にかかわる遺跡も存在することが考えられ、今後の調査が期待される。

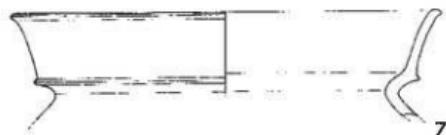
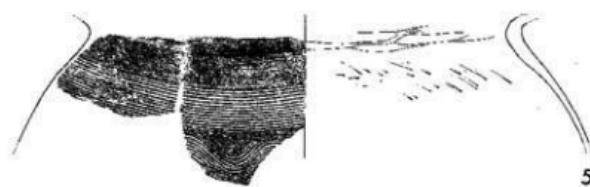
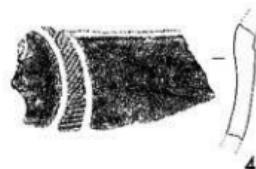
(田中 迪亮)



第17図 板屋III遺跡G 7



0 1 2 m



第18図 板屋III遺跡G 8

0 1 10 m

V. 小丸遺跡

小丸遺跡は飯石郡頓原町大字八神1569-1にある遺跡である。

位置は、標高270mの沖積平野を北上する神戸川が西に大きく迂回する地形に沿って、東から岬状に張り出した丘陵の先端部にある。(第20図)

この遺跡は、1989年に頓原町教育委員会が行った「埋蔵文化財詳細分布調査」にあたって、小丸(小字名)と言う地名であることから踏査が行われた。その結果、先端部に土塁で遮へいされた加工段と稜線を切断する二ヶ所の堀切、数基の積み石墓の他に、現地から東側の標高600mの山岳地に登る堀割の通路などが発見された。

以上のことから類推して、当遺跡は換点となる城郭に付属した監視または情報伝達を目的とした城跡ではないかと見られていた。

今回の調査は、上記の事項の確認も含めて、丘陵先端から東側に寄った二段目の堀切を中心にトレンチによる試掘を行った。試掘の規模は、堀切の底から西側の台地状の高まりを東西に横断して2m×28mと、それに直角に南北2m×9mのトレンチを設定した。

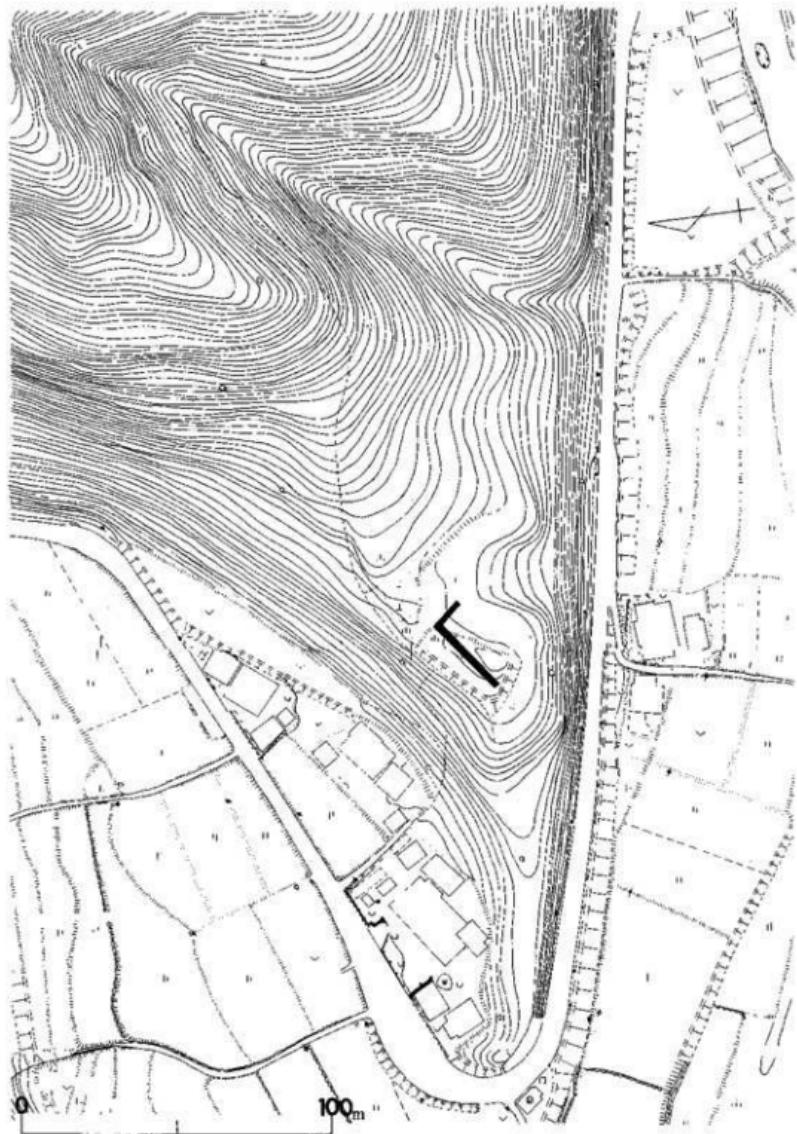
試掘の結果、各トレンチとも深さ40cmから1.0mで地山に到達したが、層序は單調で東西トレンチでは、黒褐色土(表土)、灰褐色土(ブロック状のハイカ混じり)、淡灰色土(軽石細片多數混入)の順に堆積しており、灰褐色土と淡灰色土は南側の谷に向かって連続して落ち込んでいる。南北トレンチは、黒褐色と灰褐色土の二層であった。上層・下層ともに植林等による搅乱で遺構等の痕跡は認められなかった。

遺物は、南北トレンチより石斧が一つ検出されたが、その他には遺物らしいものは全く検出することが出来なかった。従って、この石斧は流れ込みによるものであろうと考えられる。

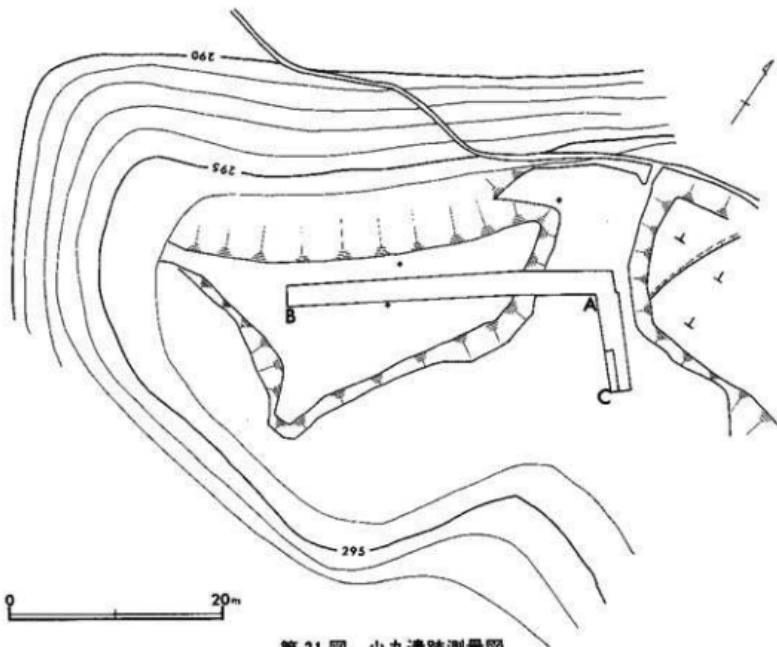
試掘によって得られた知見は、堀切の西側の台地は周囲を人為的に削り落としたものであり、かつては城郭の曲輪の一部であったと推定した。しかし周辺の地形は後世による耕作・造林・墓地等の造成によって大きく変化しており、当時の様子を推測することはできないと判断した。

なお、丘陵西側に広がる水田では今期の調査に併せて分布地調査を行ったが、その結果、畦の露頭面で上師質土器が採取された。

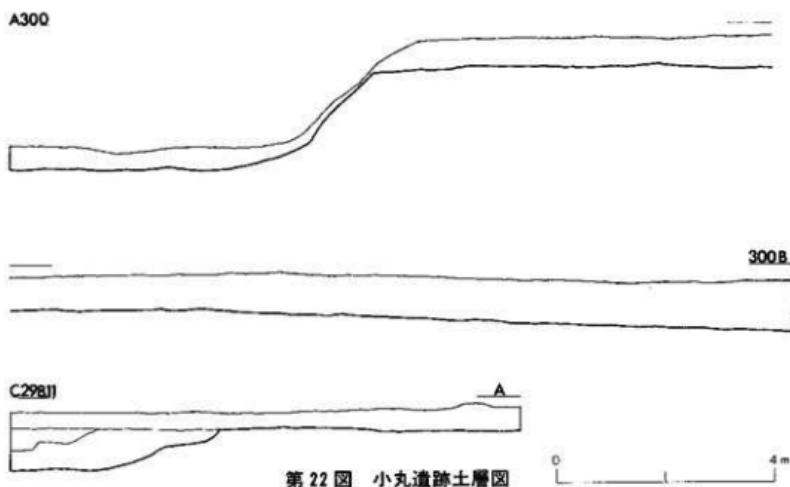
(木村直人)



第20図 小丸遺跡位置図



第21図 小丸遺跡測量図



第22図 小丸遺跡土層図

VI. ま　　と　　め

以上、板屋II遺跡の発掘調査の概要を報告した。板屋遺跡は、先に行われた詳細分布調査や試掘調査によって確認された中世城郭「徳原城跡・板屋城跡」の東端にあたる位置にあり、これらの城跡のほかにこの周囲には「徳原鉢跡・板屋奥鉢跡・弓谷鉢跡・弓谷尻鉢跡」などの製鉄遺跡がある。このうち、弓谷尻鉢跡は、この遺跡から谷を挟んで300m離れた南東の地点にある。また、100m西側にある「板屋の殿様墓」といわれる古墓には宝鏡印塔の残欠があり、発掘調査の結果、長方形の小型の石郭墓が検出されている。

板屋II遺跡については、先に行われた試掘調査では、点在する自然石と輪郭の不鮮明な暗褐色や焼上で覆われた区画があり、複数の土壙が存在するものと予測されていた。この度の調査では45基の土壙とピット群を検出した。

これらの遺構は、土壙の形状や出土遺物から、近世の墓地であることが明らかになった。発掘調査で得られた知見は次のようにある。

1. 墓壙はI・II・III・IV群に大別される。
2. 各群は、それぞれいくつかの墓壙のまとまりである。
3. I・II・III群はいずれも東西に長く、方位が意識されていたことが知られる。
4. 各群はそれぞれ一家族の墓域と考えられる。
5. 遺物は近世初期から末まであり、ほぼこの墓地の存続年代を示していると考えられた。
6. I・II・III群のありかたからすると、墓坑はそれぞれ約10年に一度穿たれたことになる。
7. I・II・III群のありかたは、今日の志津見地区で一般的にみられる墓地に共通する。
8. 各墓壙、各群のあいだには、一、二を除き、その形状や大きさ、副葬品などに若干の差はあるが、基本的にはいずれも同様なものであった。

これらの知見から、この墓地の付近に三~四家族からなる集落が近世を通して存在したことになる。その場所は特定できないが、今日、志津見地区を構成する集落のあり方は、三~四家族による集落のいくつかが集合してできていることが知られ、この地区の村落構成が基本的には近世からそれほど変化をしていないものであったと考え



板屋II遺跡発掘作業（III群）

ることができよう。

この地区の近世村落の経済基盤は、基本的には農林業であったと思われるが、生産基盤のよわい山地農民にとっては鉄生産は唯一の副収入を得る生産手段であった。この遺跡のある飯石郡と隣接する仁多郡は砂鉄を原料とした鉄生産が古代から盛んに行われていたところであり、この墓地を営んだ人々の集落もそのことと無関係ではなかったはずである。I群から出土している鉄滓はそのことを示唆しているのである（註1）、近世を通じて集落を存続させたのも豊かな鉄資源が背景にあったからであると考えられるのである。

ところで、この度の調査で、近世の墓制を考える上で大変興味深い成果があった。I・III群の墓壙のうちのいくつかに伴って、墓壙の中にむけて斜めに入り込む溝状遺構が検出されたことである。この溝状遺構は、墓壙の中にむけて節を抜いた竹を斜めに設置する為のものであり、墓参りのときにこの竹筒から水を注いだのである。死者に水を供えるという葬送儀礼は今日以上に重要であったかも知れない。

飯石郡や仁多郡に次いで鉄生産の盛んであった鐵川郡佐田町には、「たら番子が

死んだと聞けば破れ面桶で水まつり」というこれにかかる民謡が残っており（註2）、その背景にはこうした葬送儀礼を想定することができるかも知れない。

一方、このような施設をもつ墓は、妊産婦が出産以前に死亡したときにつくられ、このあたりでは大正年間までまれにみられたという。多くの場合、その妊産婦はフグ中毒死であった（註3）。今日でも沖縄地方ではハリセンボンのような無毒のフグをスタミナ食として妊産婦が食することがある（註4）。フグの毒性はあまりにも周知せられており、いくら山間部とは云えどもそうした知識が無い訳ではなかったであろう。そこには、危険を承知で食さねばならなかった事情があったのか、あるいはフグに対する知識が誤ったかたちで伝わったのか想像の域をでないが、一方ではこうした溝状造構を、大陸や太平洋沿岸に古くから広く存在するスピリットホール（註5）と結びつけて考えることもできよう。

類例の増加を待ちたい。

註

1. 大澤正己「後河内古墓群出土鉄滓の金属学的調査」「中国横断自動車道広島浜田線建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書田島根県教育委員会 1991
2. 「佐田町の民話と民謡」佐田町教育委員会 1986
3. 五明田福一氏のご教示による。
4. 関口広次「忘れられた技法」「陶説」473号 日本陶磁協会 1992
5. 内川律雄「出雲と沖縄のはなし」「八雲立つ風土記の丘No64」鳥根県立八雲立つ風土記の丘 1984

(田中迪亮・内田律雄)

VII. 写 真 図 版

----- 凡 例 -----

18-5 は本文中第 18 図 5 を示す





1. 板屋II遺跡I区（北東より）



2. 板屋II遺跡II区（西より）



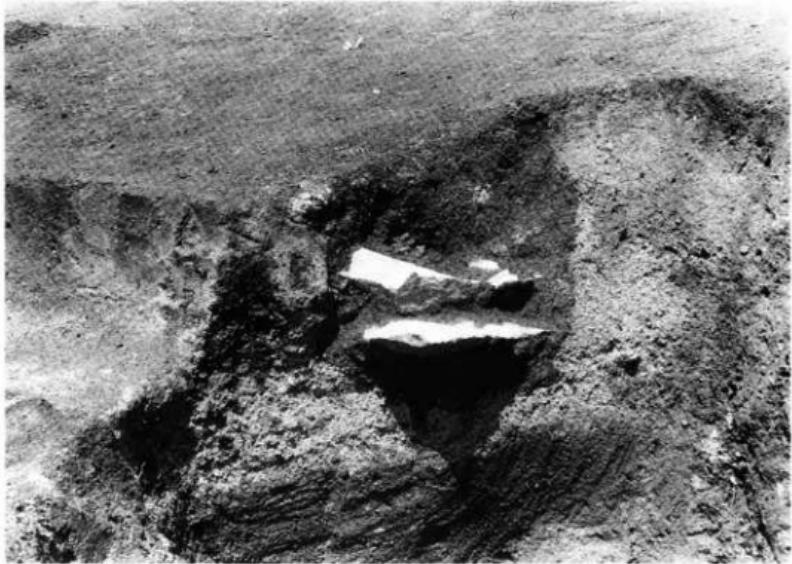
3. 板屋II遺跡I区作業風景



4. 板屋II遺跡I群墓墳（西より）



5. 板屋II遺跡I区I群SK 32.09断面



6. 板屋II遺跡I区I群SK 07断面



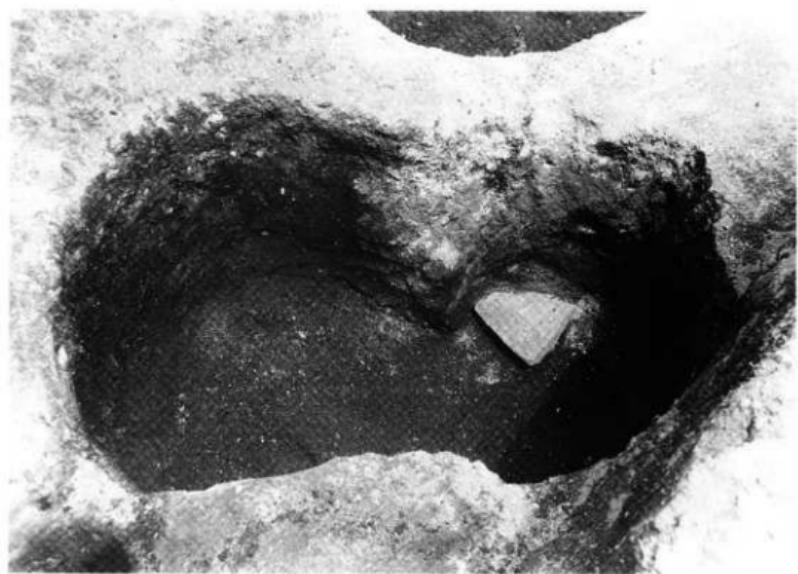
7. 板屋II遺跡I群 SK 33



8. 板屋II遺跡II群 SK 02



9. 板屋II遺跡II群 SK 24.34.25



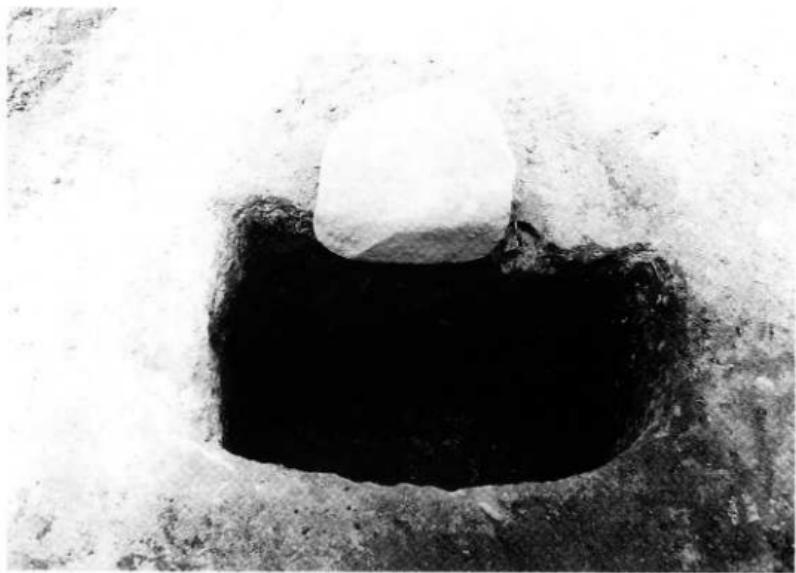
10. 板屋II遺跡II群 SK 29.35



11. 板屋II遺跡III群調査状況



12. 板屋II遺跡III群 SK 20 付近



13. 板屋 II 遺跡 III 群 SK 06 断面



14. 板屋 II 遺跡 III 群 SK 06



15. 板屋II遺跡III群 SK 11 断面



16. 板屋II遺跡III群 SK 11



17. 板屋 II 遺跡III群 SK 13



18. 板屋 II 遺跡III群 SK 16.20 断面



19. 板屋 II 遺跡 III 群 SK 18.22 断面



20. 板屋 II 遺跡 III 群 SK 22 断面



21. 板屋 II 遺跡 III 群 SK 13 付近



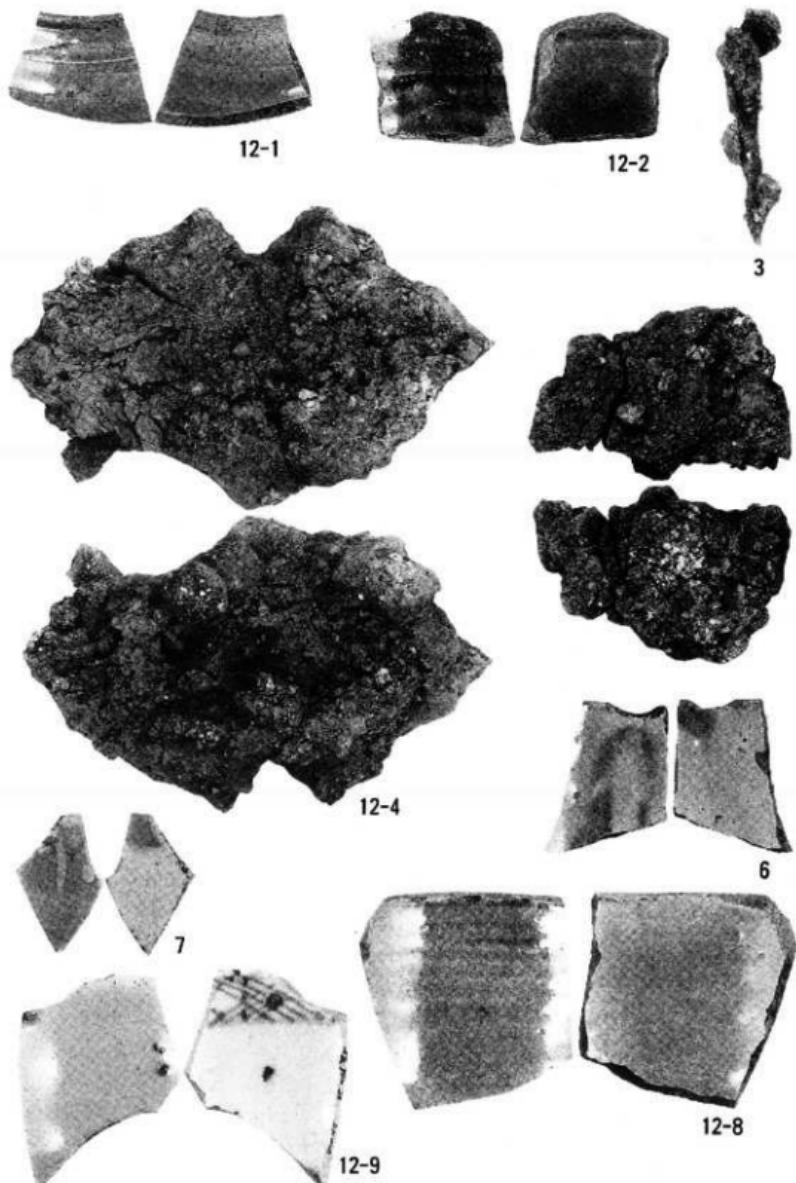
22. 板屋 II 遺跡 III 群 SK 13 付近



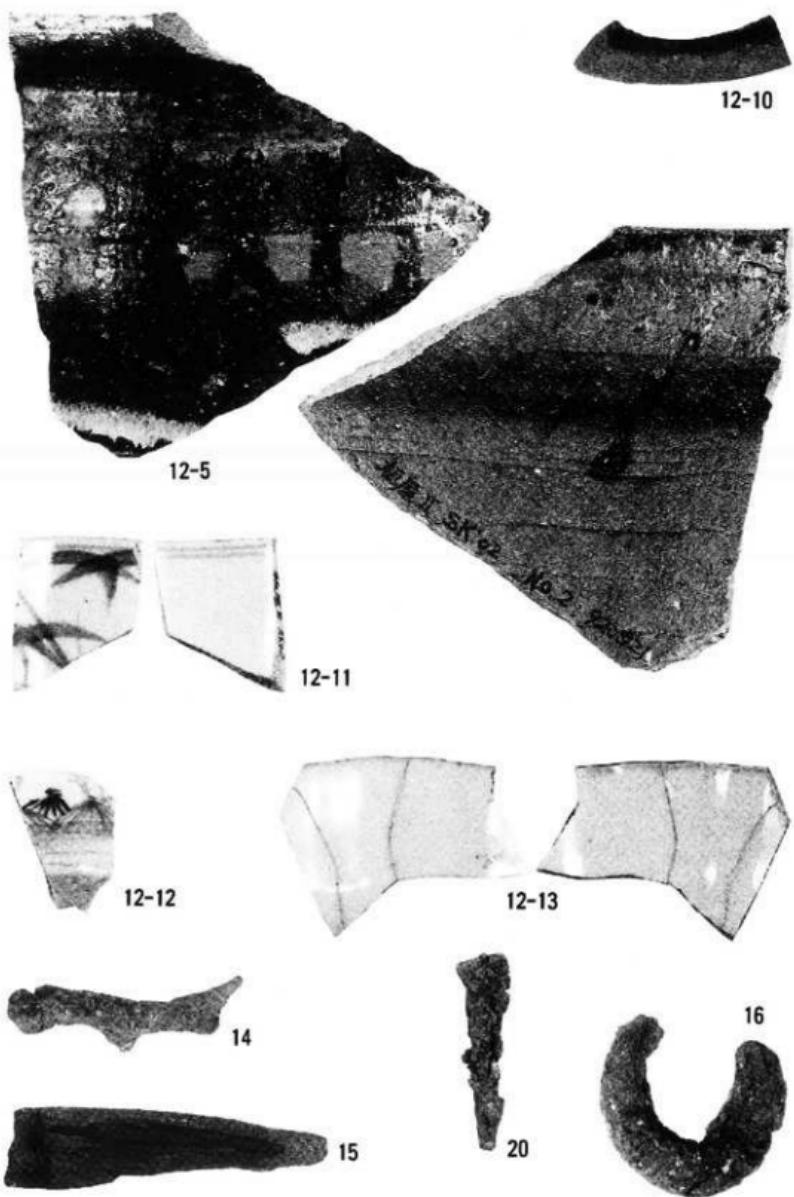
23. 板屋II遺跡IV群 SK 03.04



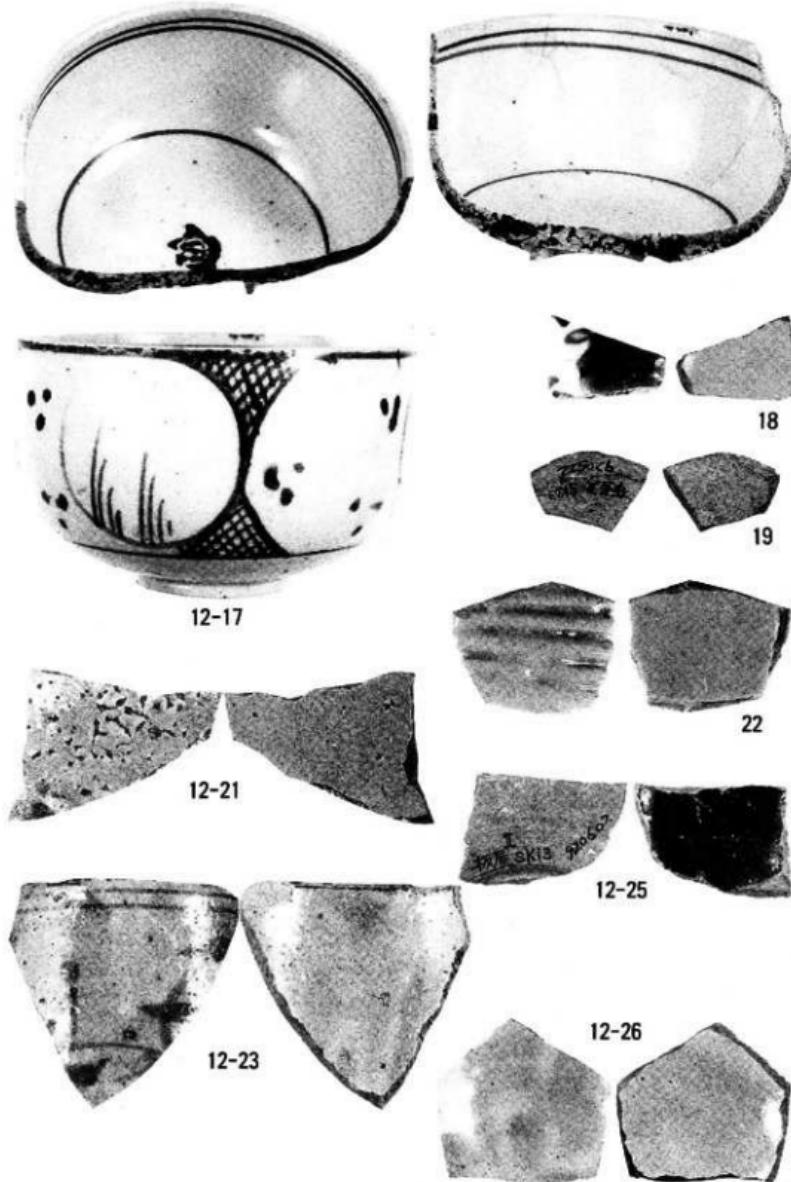
24. 板屋II遺跡IV群 SK 03.04



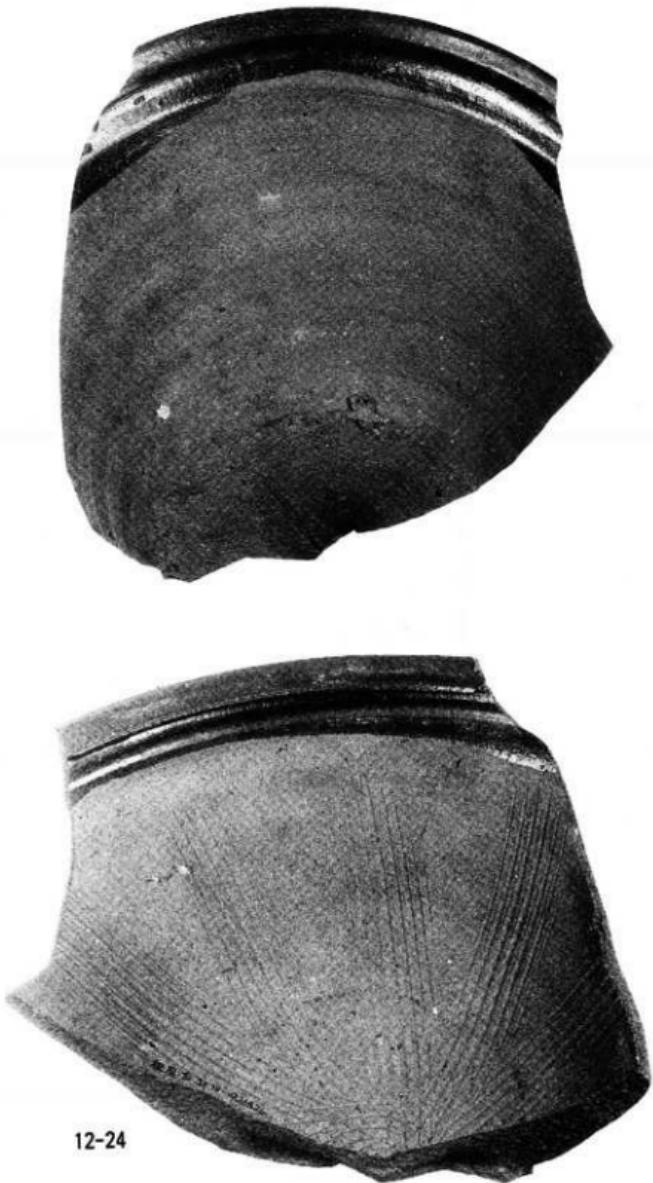
25. 板屋 II 遺跡出土遺物



26. 板屋 II 遺跡出土遺物

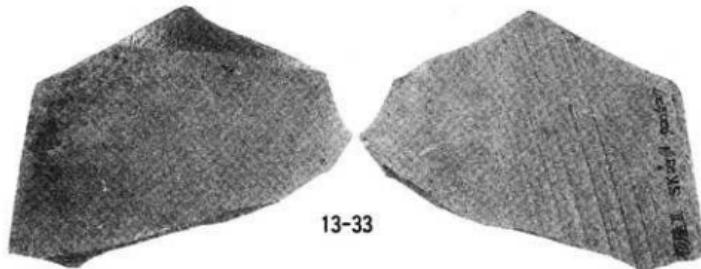
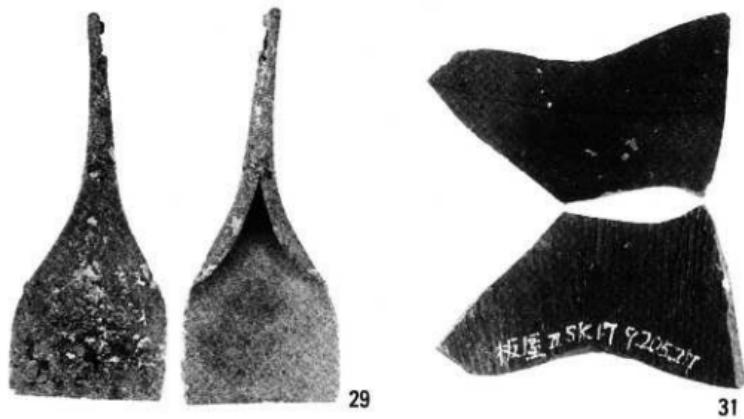
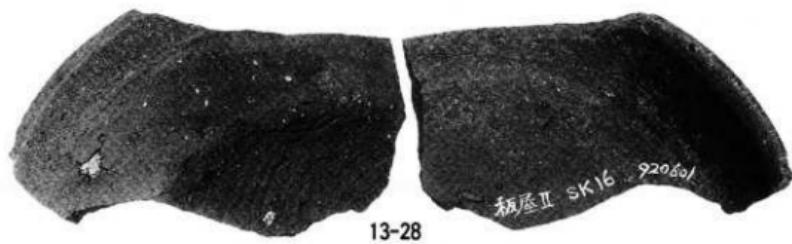
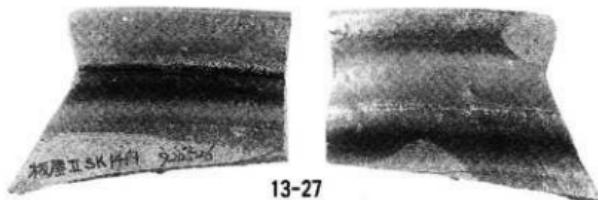


27. 板屋 II 遺跡出土遺物



12-24

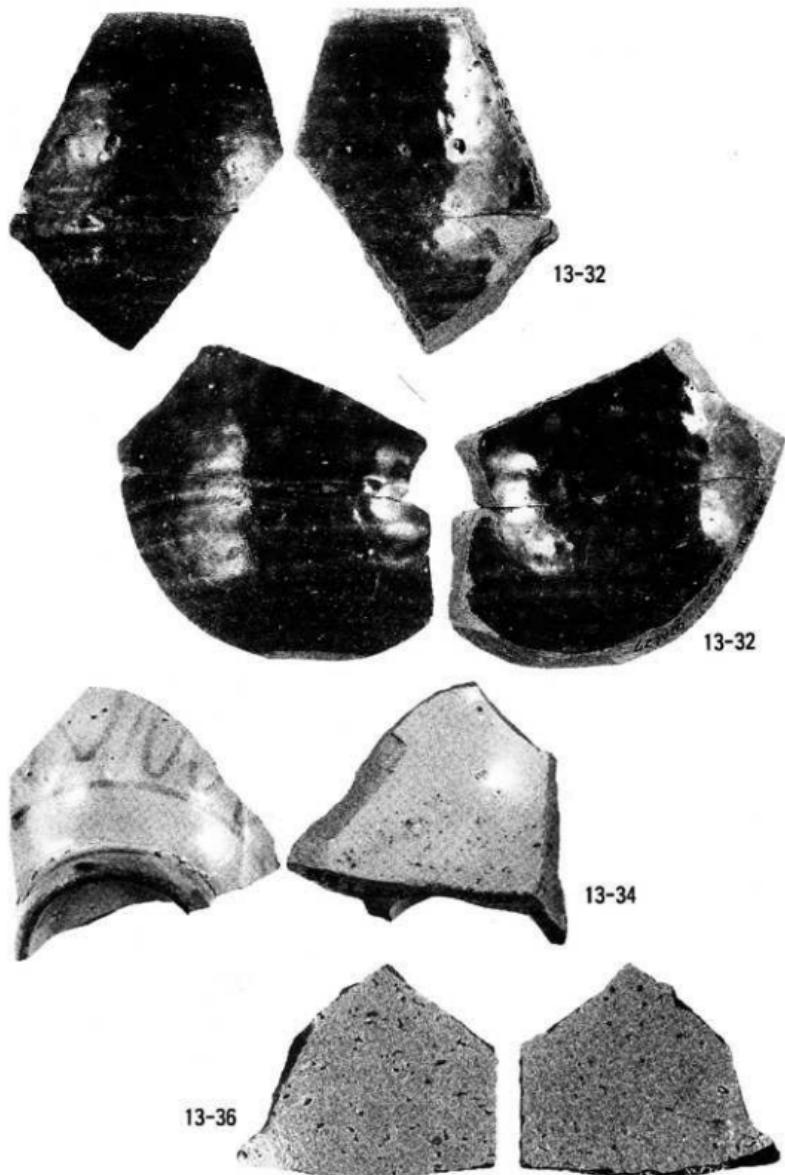
28. 板屋 II 遺跡出土遺物



29. 板屋 II 遺跡出土遺物



30. 板屋II遺跡出土遺物



31. 板屋 II 遺跡出土遺物



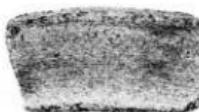
13-35



13-40



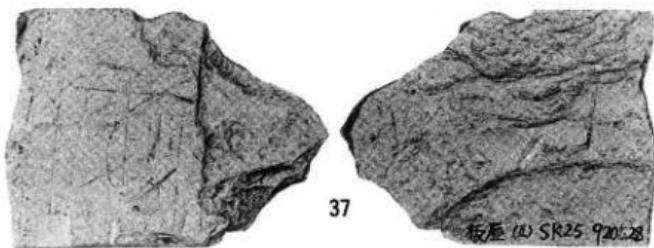
13-38



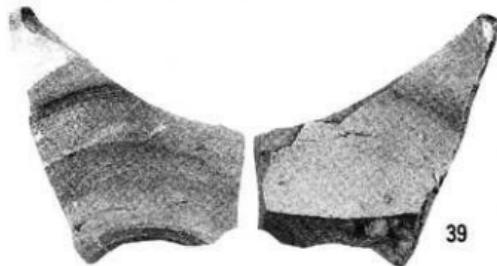
43



13-37



37



39

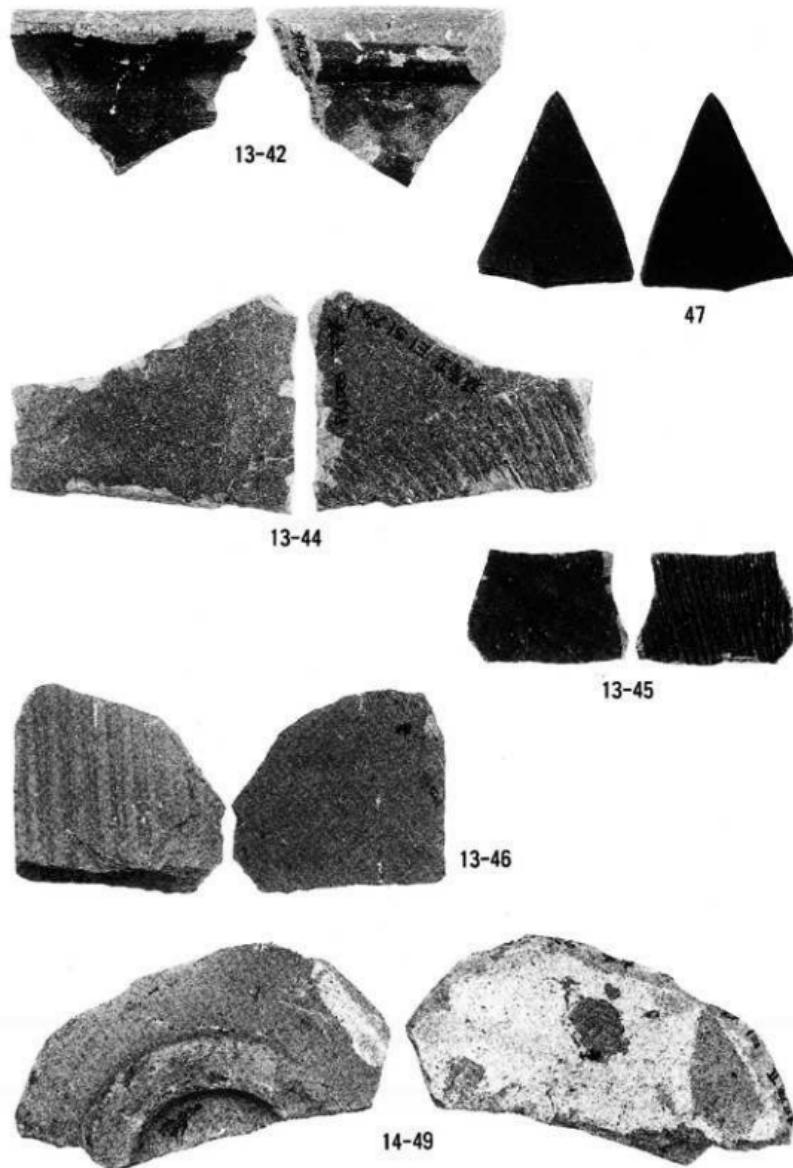


13-48



41

32. 板屋 II 遺跡出土遺物



33. 板屋 II 遺跡出土遺物



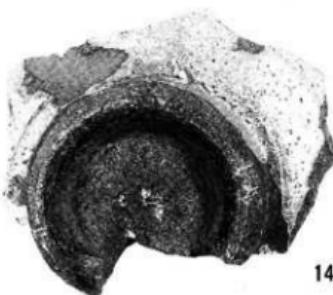
14-50



14-51



14-52



14-53



15-1



2

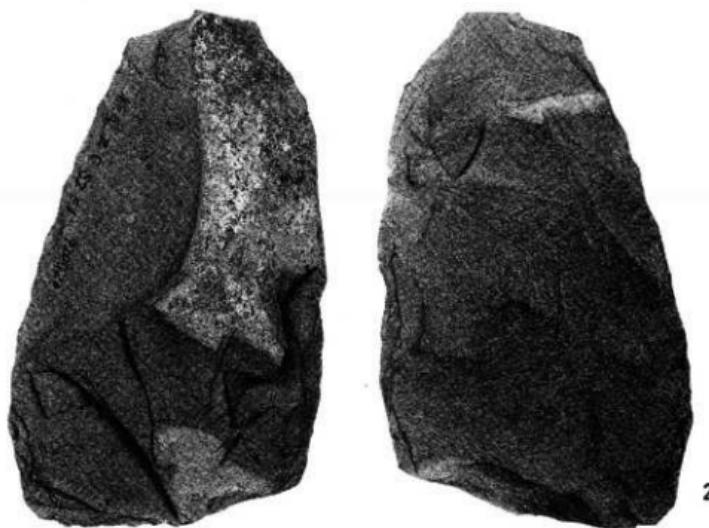


3

34. 板屋 II 遺跡出土遺物



16-1

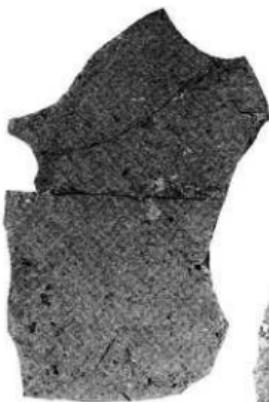


2

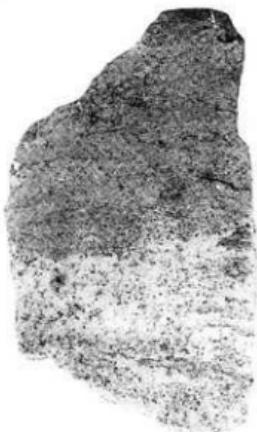
35. 板屋 II 遺跡出土遺物



16-3



16-4



5

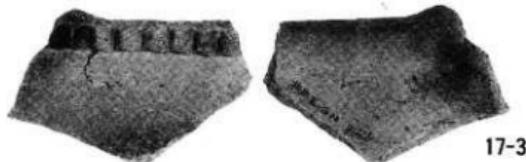
36. 板屋 II 遺跡出土遺物



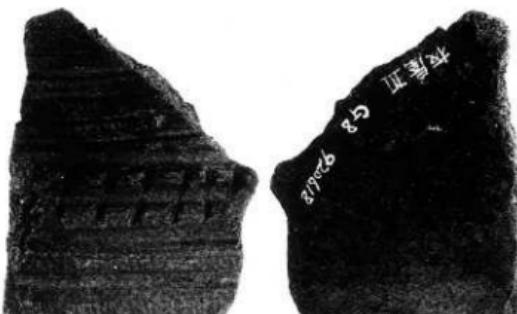
37. 板屋III遺跡G 8 (北西側から)



38. 板屋III遺跡G 8 (南東側から)



39. 板屋III遺跡出土遺物



18-6



18-7



18-8

40. 板屋III遺跡出土遺物



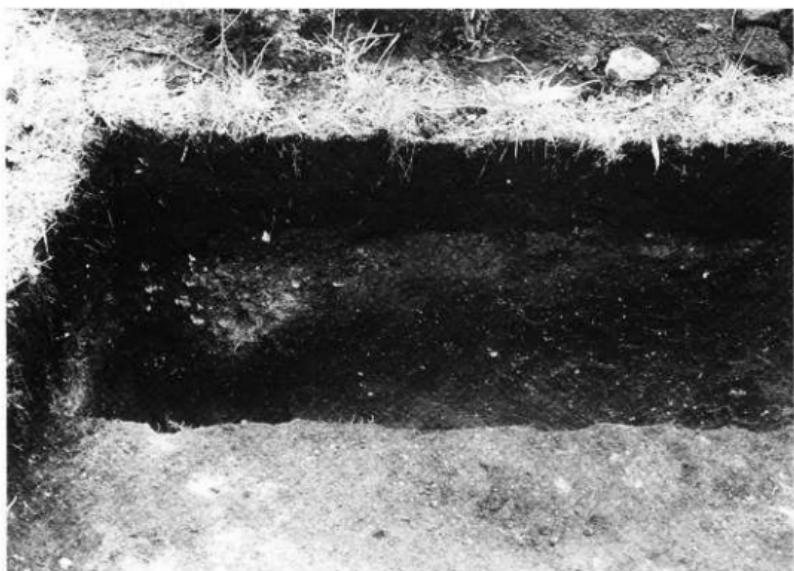
41. 小丸遺跡（調査前）



42. 小丸遺跡（調査前）



43. 小丸遺跡（トレンチ）



44. 小丸遺跡（土層断面）

【告白】
（新北市立地內埋藏文化財調查報告書）

板屋口遺跡

1993年3月31日

新北市立
烏來區教育委員會
新北市立烏來國民小學